Glassware Unearthed in East Asia (Catalogue №2: 3rd- 6th century CE)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OTANI, Ikue メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069152

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

東アジアで出土したガラス容器資料

（集成Ⅱ：三国～北魏並行期）

大谷育恵
（京都大学 白眉センター）

Ⅰ. はじめに

漢代並行期のガラス容器については、2017 年に集成を試みたことがある [大谷 2017]。今回はそれに続くものとして、北魏期までの資料を集成する。

集成対象とした時代範囲の区切りは、物質文化面において隋唐文化の形成につながる変化の初源を北魏平城期の遺跡の中にみる立場であったり、カットグラスなど同一器種の資料集成という点では適切ではないが、紙幅の都合上、便宜的に北魏までとした。およそ 3 ～ 6 世紀初めにおける東アジア地域の様相を地域横断的に把握することを目的としたため、韓半島ならびに日本列島の古墳出土資料については今回の集成に含めたが、並行する時期であっても新疆維吾爾自治区で出土した資料については本稿の集成範囲に含めていない。

3 ～ 6 世紀初めのガラス容器を対象とした先行研究としては、網羅的に資料を集めて解説をしたものとして、由水常雄 [1972;1992]、関善明 [2001]、斉東方主編 [2010]、小寺智津子 [2023] などがある。この時期の資料として特に注目されてきた資料としてはカットグラスがあり、日中韓での出土が知られているこの器種については、王志高 [2011]、馬艶 [2014]、趙永 [2014]、員雅麗・馮鋼 [2020] は多くの資料を集め、比較検討している (1。近年の新たな動向として注目されるのは、三燕については馮素弗墓の報告書 [遼寧省博物館 2015] が刊行されたこと、北魏に関しては山西省大同市の都市再開発に伴い北魏平城期の墓の発掘調査数が増加し、ガラスについても資料数が増加した点があげられるだろう。これによって、北魏平城期の資料の専論 [An Jia-yao 2009; 安家瑶・劉俊喜 2006a,b] や、北魏平城期の東西交渉の観点から論じたもの [王銀田 2005] が出てきている。韓半島の状況をみると、日本統治期に調査された古墳の再発掘調査が実施され、ガラス資料についても新たな発見があったことが注目される。

集成にあたっては、写真上で形態が似ていると感じても、実測図の上で見ると異なった印象を受ける場合もあるので、前回と同じく双方を掲載し、化学分析の結果については末尾の一覧表 (表 1~3) にまとめた。

Ⅱ. 三国（孫呉）

1. 鄂鋼飲料廠 1 号墓　湖北省鄂州市　呉中期 (2

1991 年に建設工事にともない発見・調査された複室磚室墓である。排水施設を備え、中軸線上に甬道－横前室－過道－棺室と配置した規模の大きな多室磚室墓である。墓は盗掘されていたが、「将軍孫鄰弩一張」と銘を刻んだ弩機が出土したことから、報告者は被葬者を『三国志』呉書六 , 宗室伝に記載のある孫鄰と推測している (3。

ガラス片 (M1 棺 :5) は棺室右手前側の角 (東南角) で出土した。「白色透明で、残片上には暗色の弦文が見られる。器形不明」[鄂州博物館ほか 1998:122] と報告されている。図版が公表されていないため、容器片かの確証を含め、詳細は不明である。

Ⅲ. 西晋

1. 華芳墓　北京市石景山区　西晋・永嘉元年 [307 年] 卒葬

(1 趙永 [2014] は新疆出土資料との比較で類例を集め、馬艶 [2014] は汎ユーラシア的に資料を集めているので、先述したとおり本稿集成の対象地域外の資料の方が主となっている。今回の集成対象範囲の資料を副次的に含む論考 (唐代以降が主) としては、王義康 [2007]、程雅娟 [2018] がある。

(2 発掘調査者の一人でもあった熊寿昌は鄂鋼飲料廠 1 号墓を西晋墓とする論考を出しているが [熊 2000]、2007 年に宋山呉墓の調査内容が公表されたことで [安徽省文物考古研究所ほか 2007]、以降その見方は否定されているだろう。

(3 上書宗室伝の記載によると、孫鄰は赤烏 12 年 [249] 卒。なお、鄂鋼飲料廠 1 号墓の南東では、同様に大型の多室磚室墓である鄂城 2081 号墓 (孫将軍墓) が発見されている (「孫将軍門楼也」と刻書のある青磁楼閣が出土。呉後期の墓。)[鄂城県博物館 1978]。

1965 年に発掘調査された磚室墓である。墓は平面長方形の墓室とそれにつながる甬道からなる単室磚室墓で、甬道は内外 2 重の石門で封されていた。しかし、墓は埋葬後まもなく盗掘されていた。出土墓誌から、被葬者は使持節 侍中 都督幽州諸軍事 領烏丸校尉 幽州刺史 驃騎大将軍 博陵公の王浚(おうしゅん)夫人、華芳であることが判明する [毛遠明 2008:340-345]。

ガラス碗は墓室内に安置された漆棺東側から砕けて出土した [北京市文物工作隊 1965:22]。1985 年に中国社会科学院技術室の研究員によって復元され (図 1,3; II-1)、碗は「丸底、球状の腹、頸部はやや窄(すぼ)み、口は外に開く。高さ 7.2cm、口径 10.7cm。腹部には 10 個の楕円形の乳状突起が装飾としてあり、1 列に並んでいる。乳状突起には規格性がなく、一般的に碗器壁から 5mm 突出」している。また、「底部には 7 個の突起が楕円形に並び、突起の高さは 2mm。これは装飾あるいは脚であり、丸底を安定して置けるようにしている。このガラス碗は淡緑色透明で、内に気泡と条紋をやや多く含み、気泡の大小はばらばらである。」[安 1986:174]。2 か所の研究所で化学分析が行われ、その結果は表 1 のとおりである。

2. 五里墩(ごりとん) 121 号墓 (鄂城 4021 号墓)(4　湖北省鄂州市　西晋前期

1978 年に鉄道複線化工事に伴って発見・調査された甬道(ようどう)と墓室からなる単室磚室墓である。12 点のガラス容器片が発見されており、2 点のガラス碗があったものと考えられている [南京大学歴史系考古専業ほか 2007:303-304]。

ガラス碗 M4021:3(図 1,3; II-2a) は 11 点の破片をつないで復元された。「口は外に開き、球形の腹、丸底である。色は淡く、黄緑色を帯び、透明度に優れ、胎中には小さな気泡を含み、口縁部は平らに磨かれている。腹部と丸底上には円形の研磨装飾があり、円形研磨装飾で構成した 4 段の連珠装飾があり、腹部の 3 段の研磨装飾は 3 組の凹細線文で隔てられている。口径 10.2cm、腹部最大径 11.0cm、復元後の高さ 9.4cm。口縁と研磨装飾のない部分の器壁の厚さは 0.3cm、研磨装飾部分の厚さは 0.2 ～ 0.25cm。」

(4『鄂城六朝墓』で鄂城一帯の墓が一括報告された際に統一番号が付与されており、その番号に従うと「鄂城 4021 号墓」である。

M4021:4 もカットグラス片で、碗上腹部の破片である。「1 周の楕円形研磨装飾のうちの 3 個半分の研磨装飾が残っており、また下段の周の 3 個分の研磨装飾上部の円弧がみられる。現存する 3 個半の研磨装飾の上下にはそれぞれ 1 組の凹細線文がある。この破片の色は淡い黄緑色で、透明度は高く、胎中に小気泡を含む」。破片の弧の強さからみて、碗 M4021:3 よりその腹径は小さいが、研磨装飾は密であるので、各段に施された研磨装飾数はそれより多いものと推測されている [同 :303-304]。

3. 煎薬廟 1 号墓　江蘇省邳州(ひしゅう)市新河鎮　西晋中晩期

2015 ～ 2016 年に発見・発掘調査された 9 基の磚室墓のうちの 1 基である。1 号墓は直線状に並んだ「甬道－前室－後室」という単位を 2 つ並列配置した平面プランの磚室墓である。ガラス碗は西側後室の被葬者に伴って出土した (図 9 Ⅲ -3)。

ガラス碗 M1:79(図 1,3; II-3) は、「口は外に開き、口縁端部は丸く、内面口縁下に沿ってややくぼむ。頸部は窄(すぼ)まり、腹部は丸く膨らみ、下腹部は弧をえがいて収束する。腹部中程には突起があり、中空で、下腹部には突起に対応して縦方向の突稜があり、底部に向かって弧をえがいている。丸底で、底には 7 つの突起の脚があり、脚の突起には円形の穴が通っている。口径 10.6cm、最大腹径 11.6cm、高さ 7.6cm。」[南京博物院ほか 2018:32]。

(参考) 蔡甸(さいでん) 1 号墓　湖北省漢陽市　西晋以前

1965 年に井戸掘削に伴い発見・調査された長方形の墓室を持つ片袖型の単室磚室墓である。この墓で出土した「料珠」をガラス容器とするものもあるので言及しておくと、料珠 (M1:14) は「径約 7cm、器壁厚 0.5cm。出土時に破損して砕片となった。全体が透明で光沢があり、わずかに黄緑色を呈し、硬度はガラスとほぼ同一。」と報告されている [湖北省博物館 1966:196]。後に成分分析を実施し、カリガラスであると報告されている [湖北省博物館保管部歴史文物庫 1983]。容器として良いのかは不明であるため、本集成には含めなかった (5。

(5 この資料を容器として報告する論考は、安家瑶 [1984; 1986b] が「瓶 (?) 1 件」として記載することに依拠していると思われる。組成の化学分析は北京の建築材料科学研究院で実施されており、容器とするその判断と器種は安家瑶の実見に基づく判断であるかもしれないが、分析報告の方では単に「古玻璃」と呼称されている。

Ⅳ . 東晋

1. 獅帯崗 5 号墓　広東省広州市　両晋交替期～東晋早期

広州大学敷地内で 1986 ～ 1989 年に調査された 4 基の晋墓のうちの 1 基である。5 号墓は甬道、前室、後室が直線に並んだ多室磚室墓である。後室は調査前にすでにひどく乱されており、ガラス器は破壊に伴い磚等に押しつぶされ破片になった状態で出土した。

ガラス器破片 (M5:18) は欠失部分があり、碗あるいは杯と推測されている。「残片の中には弧壁を呈するところがあり、器壁外には一本の凸稜線がある。藍色で、表面には一層の白色風化層があり、断面には気泡がみられる。器壁は極めて薄く、2mm 以下、最も薄いところは 1mm あるばかりである」[広州市文物管理委員会 1996:43]。中国社会科学院南海海洋研究所の研究員によって EPMA 分析が行われており、その結果は表 1 のとおりである。

2. 来隴東晋墓　安徽省当塗県　東晋初期

2005 年に道路工事中に発見され、緊急発掘された前後二室からなる磚室墓である。古くに盗掘を受けており、後室堆積土中および崩落磚下からガラス片 4 点が出土した。

ガラス片 (図 1; III-2) の表面はいずれも霧状の風化層で覆われている。「破片表面は滑らかで、緩やかにカーブし、淡緑色を呈する。破片の形状および色艶から判断して、この 4 点はおそらく同じガラス碗の口縁、腹部、底部と考えられる。この碗の口は外に開き、丸い口縁端、底が碗内側に大きく窪む。計算復元すると、この碗は口径 13cm、底径 5cm、高さは不明。」[李軍・羅海明 2006:35-36]。中国科技大学の研究者によって分析がされており、その結果は表 1 のとおりである。

3. 南京大学北園晋墓　江蘇省南京市　東晋前期 (6

南京大学北園の東北部にある鼓楼崗南斜面に位置し、校舎建設に伴い 1972 年に発掘調査された。墓は墓室右手側 (東) に側室が付属する複室磚室墓で、甬道では内外二重の門扉槽が確認された。墓は早くから何度も破壊を受けていた。ガラス碗は主室と側室をつなぐ甬道入口付近で出土した。

ガラス碗 (図 1; III-3) は、「すでに砕けている。破片からみると、元来は 1 点の広口で口部が広がり、腹部がやや丸く膨らんだ杯である。口径は約 10cm、厚さはわずか 1mm。白色で、透明度は比較的高い。口縁下に 2 本の線がめぐり、腹中部にも 2 本の線がめぐる。腹中部の 2 本の圏線を境として上下対象に花弁形の文様があり、腹上部の円形花弁文様は上に向かって尖り、腹下部の楕円は下に向かって尖っている。破片を拡大鏡で観察すると、比較的多くの気泡が見られる。」[南京大学歴史系考古組 1973:44]。成分分析が実施されており、その結果は表 1 のとおりである。

4. 坪石崗 1 号墓　広東省肇慶市端州区　太寧 3 年 [325 年]

2001 年に工事中に発見・調査された磚室墓で、横長長方形の前室に縦長長方形の後室がつながった前後二室構造の墓である。棺が安置された後室左手側には北耳室、奥壁には壁龕が設けられている。ガラス碗 1 点が出土したが、発見時に荒らされたために原位置等は不明である。

ガラス碗 M1:29(図 1,3; III-4) は、「器体は薄い。広口で、口は大きく外に開き、口縁端下でやや窄まる。丸い腹、丸底である。白色透明で、僅かに緑色を呈する。重さ 54g。口径 8.8cm、高さ 7cm。」[広東省文物考古研究所ほか 2004:259]。墓からは銘文磚が出土したことから (7、墓の年代を推定できると同時に、墓主は蒼梧広信侯に封ぜられた人物であることが分かる。

5. 象山 7 号墓　江蘇省南京市棲霞区　東晋前期

琅琊王氏の墓が集中する象山の西側斜面にある (8。7 号墳は 1970 年に発見・調査されたほぼ正方

(6 王志高 [2003] は南京大学北園晋墓の被葬者を元帝 (司馬睿) の建平陵に比定しており、それに従うと太寧元年 [323] 葬。(「鶏籠山之陽」に埋葬された東晋皇帝は 4 名で、東晋前期にあたる三帝 (元帝、明帝 [325 年卒葬]、成帝 [342 年卒葬]) のいずれに比定するかで様々な意見がある。)

(7 磚「泰寧三年太歳在乙酉五月壬申立、大吉昌」、「泰寧三年正月十五日立」、「吉且陽、宜侯王」、「高□□□広州蒼梧広信侯也」。

(8 象山にある 11 期の墓のうち、7 基は墓誌の出土から被葬者が判明する。象山 1 号墓は王興之・宋和合葬墓、象山 5 号墓は王閩之墓 (升平 2 年 [358] 卒)、象山 3 号墓は王丹虎墓 (升平 3[359] 卒葬)、象山 6 号墓は王彬の継室夫人夏金虎墓 (太元 17 年 [392] 卒)、象山 8 号墓は王佖之墓 (泰和 2 年 [367] 卒)、象山 9 号墓は王建之・劉媚之合葬墓 (王建之は泰和 6 年 [371]

形の墓室をもつ単室磚室墓である (図 9 Ⅲ -5)。保存状態が良く、墓室には墓門側を頭位として 3 棺が置かれており、中央棺が男性、両側の棺が女性であった。ガラス杯は 2 点出土し、1 点は男性棺、もう 1 点は左側女性棺 (南) の頭側で出土した [9]。

ガラス杯 2 点 (図 1; III-5) は同形であり、「白色の中に黄緑色を帯び、比較的透明。気泡を含み、ガラス質であることを裏付ける。円形の口部はやや外に開き、直筒形である。口外側に 1 周の線および平らな花弁形研磨文様をきざむ。腹部には楕円形研磨 7 つを刻み、表面は平滑である。底部付近は幅狭で長い花弁形になっている。口径 9.4cm、底径 2.5cm、高さ 10.4cm、器壁厚 0.5 ～ 0.7cm。」[南京市博物館 1972:31]。

6. 仙鶴観 6 号墓　江蘇省南京市　東晋前期

1998 年に道路工事中に発見された。墓室西南角が工事で一部破壊されたものの、未盗掘と考えられる墓である。穹隆頂の単室磚室墓で、長方形の墓室の長辺に沿って 2 棺が置かれていたことが痕跡から分かり、右手側 (東棺) が男性、左手側 (西棺) が女性と推測されている。ガラス碗は西棺内で出土した (図 9 Ⅲ -6)。

ガラス碗 M6:83(図 1,3; III-6) は、「やや青みを帯びた白色で、小さな気泡を少なからず含む。やや内すぼみで口部は立ち、頸部はくびれ、腹部は膨らみ、丸底。肩と腹部に 3 本一組の極浅く細い圏線が回っている。腹部および底部に 4 段の研磨した縦長楕円形の文様があり、さらにその第 3、第 4 段目の間には 7 個の横長楕円形の文様が一周ある。出土時、碗底には漆托の痕跡があった。口径 9.1cm、高 7cm、厚さ 0.1~0.15cm。」[南京市博物館 2001:19]。

7. 富貴山 4 号墓　江蘇省南京市　東晋前期

1997 年に発掘調査された長方形の単室磚室墓で、甬道には門扉槽を備える。天井が崩落し、やや墓室内は乱されていたが、ガラス碗は墓室中央付近で器類と並んで出土し、銀碗 (M4:22) を托子として一組を構成していたと推測されている (図 9 Ⅲ -7) [南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998:43,47]。

ガラス碗 M4:23(図 1,3; III-7) は「淡い青色で、むらなく透明。丸みのある口縁、やや内に窄まる口部、頸部はくびれ、球状の腹、丸底でやや底が内に窪む。20 本のの線が薄く隆起し底部から下腹部にのび、花弁状の装飾の如きである。口径 8.5cm、高 7.8cm。底部の最も薄い所は 0.02~0.03cm、底部の最も厚い所は 0.4cm。」[同 :43]。

8. 上坊李村東晋墓　江蘇省南京市江寧区　東晋前期

調査報告は出ていないが、江寧区博物館の内部資料に基づいた王志高 [2011:57] によると、2007 年に上坊李村の岩山南麓で発見された単室磚室墓でガラス片が出土しているという。出土位置は甬道と墓室の間で、「残片はいずれも藍色で、同一ガラス容器の破片とみられる。一部のやや大きな残片からみると、その器形は口がまっすぐ上にたちあがった玻璃杯で、口縁下に 1 周の研磨による凹楕円形文がめぐり、器壁の厚さは 0.4 ～ 0.6cm である。器形は象山 7 号墓出土品に比較的近い。」という。

9. 石門坎東晋墓　江蘇省南京市　東晋前期

1955 年に建設工事の採土にともない発見・調査された長方形の墓室をもつ単室磚室墓である。古くに盗掘されていたが、碗皿類とみられるガラス片が墓室中部で出土した [李鑑昭・屠思華 1958]。王志高 [2011:57] によると、「残片はいずれも青緑色で、一部のやや大きな破片には浅い線文と花弁状に細長い楕円形研磨文様がある」という。

10. 汽輪電機廠大墓　江蘇省南京市　東晋中・後期

1980 年に工場建設に伴い発見され、発掘調査された墓である [10]。穹隆頂で長方形の墓室を持つ単室磚室墓で、甬道には内外二重の門扉槽がある。墓は複数回盗掘を受けていた。墓は規模からして東晋中・晩期の皇室成員あるいは豪族の墓と考えられており、報告では穆帝永平陵 (升平 5 年 [361] 卒葬]) の

卒、咸安 2 年 [371] 遷葬 / 劉媚之は泰和 6 年 [371] 卒葬)、象山 11 号墓は王康之・何法登合葬墓 (王康之は永和 12 年 [356] 卒葬 / 何法登は太元 14 年 [389] 卒葬)。

(9 報告者は 7 号墓を東晋前期であることは疑いないとし、墓の年代と規模を基に史書中の条件に合う人物を探し、被葬者を王廙かと推測している [南京市博物館 1972:33-34]。一方で、林梅村 [2017] はこの 7 号墓を劉宋期の墓とし、3 人の被葬者を劉英媛 (劉宋文帝第六女 , 臨川長公主)、駙馬の王藻、呉崇祖かと推測している。報告者の意見をとるが、林梅村が劉宋墓とみている理由が、①墓の形と規模、②馬俑の鐙が短柄横穿型鐙であること、③ダイヤモンド象嵌指輪、④ガラス杯の出土である。

(10 この墓は、北箇山 ([NHK 大阪放送局編 1992])、幕府山 2 号墓 ([蒋賛発 1992]; 干・黄 [1986]) などの名称でも記載されている。

可能性を指摘している [南京市博物館 1983:321]。

出土したガラス片には、淡黄色 (図 1; III-10a) と深藍色の二色があった。「淡黄色のものは計 25 片が出土し、最大の破片は長さ 5.5cm、幅 3cm。最小の破片はソラマメの大きさである。破片上には円、楕円、線文等の研磨文様があり、観察の結果、2 点の深い筒形容器であったようである。」[同 :320]。両色破片ともに成分分析が行われており、その結果は表 1 のとおりである。

(参考) 郭家山 13 号墓　江蘇省南京市　東晋後期

2001 年に発見調査された長方形の墓室を持つ単室磚室墓である [11]。甬道には門扉槽が一条あり、墓室側壁の手前よりには仮窓と凸字形の龕が設けられている [12]。墓は盗掘を受けており、甬道にあけられた盗掘坑付近の床にはガラス片が残されていた。報告では藍色と透明の 2 種の小さなガラス残片と記載しているが [南京博物館 2008:22]、資料を実見した王志高によると、数 10 点ある破片は藍色、無色透明、緑色の 3 種であるという [王志高 2011:57]。加えて、破片の質感および厚さからみて、それらは同一のガラス容器のものではないと言及しており、それらを容器の破片としている。今後検討が必要な参考資料として挙げておく。

Ⅴ . 北燕

1. 馮素弗墓　遼寧省北票市　太平 7 年 [415 年] [13]

1965 年に盗掘に遭い、緊急発掘された。彩絵木棺を安置した竪穴石槨墓で、丁寧に組まれた石槨壁には石灰を塗った上に壁画が描かれていた。この墓からは 4 顆の印が出土し、その官爵「范陽公」「遼西公」「車騎大将軍」「大司馬」が『晋書』馮跋載記に記載された馮跋の弟・馮素弗と一致することからこの墓の被葬者に比定されている。ガラス容器は 5 点出土したが、盗掘で出土時の状況は不明である。

碗 M1:68(図 1,3; IV-1a) は「息を吹き込んで作った大きなガラス玉を切り開いて製作している。淡緑色透明のガラスで、透き通り、小さな気泡がある。口が大きく、器高は低く、小さな圏足がある。口に近い所で次第に器壁が立ち、口縁を切った後に鉗子で挟んで内に巻き、内壁に貼りつけて内巻き口縁を作るので、口の外にも一周の凹線挟み痕が残っている。底には断面円形のガラス棒を巻いて貼り付け、小圏足とする。圏足内の中央にはポンテ痕がある。(略)[14] 口径 13cm、底径 4.4cm、高 4.1cm。」[遼寧省博物館 2015:34]。

碗 M1:69(図 1,3; IV-1b) は吹きガラス技法で製作された深緑色のガラス碗で、「小さな気泡を含む。大きな口はわずかに外に開き、口縁端は丸く、口の下でややくびれる。直胴で、底中央が上に上がる。底外面にはポンテ痕がある。(略) 器表は浸食があり、紫黄色の光を放つ。口径 9.4cm、腹径 8.4cm、高 7.7cm。口縁部の厚さ 0.27cm。」[同 :36]。

その形状から「鴨形器」と呼ばれている M1:70(図 1,4; IV-1c) は吹きガラス技法で製作されており、一端は鴨の嘴のように上下が引き伸ばされており、別の一端は管状で、先が欠失している。頸部と胴上部の 2 か所には 3 ～ 4 周ガラス紐が巻き付けられており、その間にも波状のガラス紐 1 周がある。胴部には連続して U 字形を描くガラス紐が背側と腹側とを二分割するように回っている。背側の空間には、1 本のガラス紐で連続三角形の文様を描く。腹側空間には、腹から頸部を往復させたガラス紐の出発点の上に扁平なボタン状の円形ガラスを押し付け、またその周囲にも波状のガラス紐装飾が 1 本ある。淡緑色透明のガラスで、器胎には小さな気泡を含む。残存長は 20.5cm、腹径約 5.2cm。

碗 M1:71(図 1,3; IV-1d) は、「大きな口はわずかに内に窄まり、内に巻かれる。腹は丸く膨らみ、丸底。口径 9.5cm、残存高 9.2cm、器厚 0.2 ～ 0.3cm。」[同 :36]。

破片 M1:72(図 3; IV-1e) は脚部の破片と推測されている。底径 7.6cm、残存高 1.2cm、器厚 0.2cm[同 :36-37]。

Ⅵ . 南朝 (劉宋)

1. 春城南朝墓　江蘇省句容市　元嘉 16 年 [439 年]

1984 年に村民によって発見され、緊急調査された。穹窿頂の平面長方形の墓室をもつ単室磚室墓である。外面を黒色、内面を赤色に漆塗りした木棺 2

(11 郭家山 9 号墓は温嶠 [南京市博物館 2002]、12 号墓は温嶠の子の温式之 [南京博物館 2008] の墓で、この墓群は太原温氏の墓地である。

(12 側壁の龕と仮窓については、図 9 を参照。

(13『晋書』馮跋載記附馮素弗伝から卒年が判明する。

(14 ポンテ痕に関する解説は解釈に問題があるため省略した。以下、他の器も同様。

棺を並列安置した夫婦合葬墓で、ガラス碗は甬道からみて右手側 (東) に置かれた 1 号棺 (女性棺) の脚部側で出土した [15]。この墓からは 3 点の文字磚が発見されており、1 点に「元嘉十六年太歳巳」の文字があったことから築造年代が推定できる。

報告の記載によると、ガラス碗 J440[16](図 1,3; V) は「口は開き、頸部は締まり、球形の腹で、丸底である。肩部は 1 周の凸線がめぐり、腹部と底部には規則正しく並ぶ菱形文がある。口径 8.5cm、腹径 9.3cm、高さ 6.5cm」[鎮江博物館・句容市博物館 2010:42]。

Ⅶ. 北魏

北魏平城期

1. 大同南郊 107 号墓　山西省大同市　平城期 (大同南郊 3 期 [17])

1987 年に大同市電焜(でんかん)器材廠の拡張工事に伴い発見された墓地で、1988 年に発掘調査された。107 号墓は長斜坡道をもつ土洞墓で、台形の墓室右手側に龕(がん)を設けている。墓室には木棺 1 具があり、棺内の左手側空間からガラス碗は出土した (図 9 Ⅵ -1)。

ガラス碗 M107:17(図 1,3; Ⅵ -1) は、「淡い黄緑色透明で、口はわずかに外に開き、口縁端部は丸く、広口。頸部はやや窄まり、球形の腹、窪む丸底。頸部はくびれて溝状になり、頸部下の腹部外壁には 4 段の楕円形凹文が研磨されている。長楕円形凹文は各段 35 個、段と段の間はまちまちである。楕円形凹文は長径 1.3 ～ 1.5cm、短径 0.7cm 前後。丸底中央は直径 3.4cm の楕円形カット、その周囲を取り囲む 6 個の楕円形カットと接している。楕円カットはあまり規格性がなく、長径 3.2cm、短径 2.8cm。6 個の楕円形カットの間上方にも各 1 個の長楕円形凹文がある。器体は頸部以下全てが磨かれている。内壁は滑らかで、外壁にはやや黄色の銹斑がある。口径 10.3cm、腹径 11.4cm、高さ 7.5cm。」[山西大学歴史文化学院ほか 2006:230]。

(15 報告者も発掘調査時の記録に基づいて出土位置を推定している [鎮江博物館ほか 2010:38]。

(16 句容市博物館の所蔵品番号 [鎮江博物館・句容市博物館 2010:38]。

(17 太武帝の黄河流域統一後～太和初年 (439 ～ 477 年頃)。

2. 伊和淖爾(イフ・ノール) 1 号墓　内蒙古自治区錫林郭勒盟正鑲(シリンゴル　せいじょう)白旗　北魏平城期 (5 世紀後半)

2010 年に盗掘事件から墓地の存在が明らかになり、緊急調査された。1 号墓は長斜坡道をもつ土洞墓で、墓室は正方形に近く、中央に木棺 1 具が置かれていた。盗掘によりひどく乱されており、ガラス碗も回収された盗掘品のうちの 1 つである。

ガラス碗 M1:15(図 2,4; VI-2) は「完形。藍色、透明で、直口、弧状の腹で、小圏足を持つ。口径 10cm、底径 4cm、高 4.1cm。」[中国人民大学歴史学院考古文博系 2017:33]。

3. 大秦鉄路湖東編組站 21 号墓　山西省大同市　北魏平城期

『平城文物精粋』に 1986 年に大秦鉄路湖東編組站北魏墓より出土として掲載されている資料である (図 2; VI-3)[18]。「吹きガラスで形成。濃藍色半透明のガラスで、器胎が薄い。口は窄(すぼ)まり、円錐形の腹で、一端は円錐形の注ぎ口になる。注ぎ口部分の近くには小さな扁平円形のガラス 1 つが付けられている [19]。別の一端の腹の器壁は荒れてしまっているが、真ん丸で、あけられていた穴を留めている。表面には土が沁みついている。」長さ 20cm[大同市博物館 2016:60]。

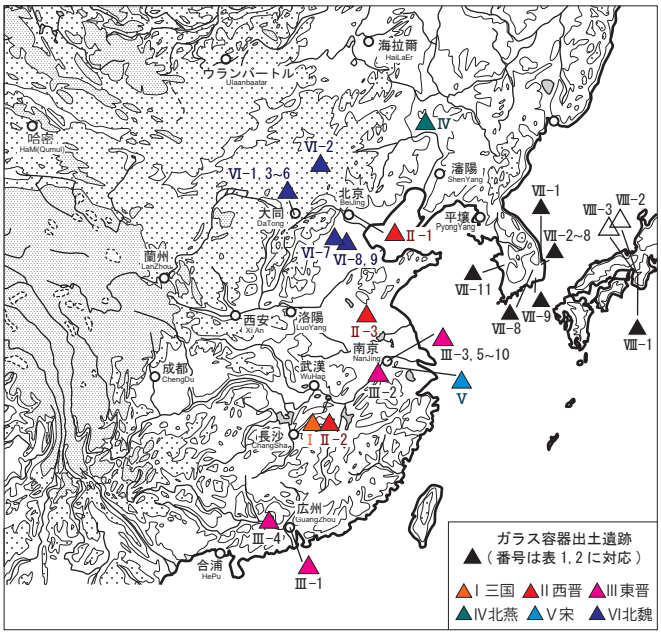
4. 迎賓大道 16 号墓　山西省大同市　北魏平城期

2002 年に道路建設に伴い実施したボーリング調査で発見・調査された。16 号墓は穹隆頂(きゅうりゅうちょう)をもつ正方形に近い墓室の単室磚室墓である。壁画が描かれていたが、盗掘や水の滲み出しで大半が剥落していたという。

ガラス壺 M16:4(図 2,4; VI-4) は、「淡青色半透明。丸い口縁端部、喇叭状に口が開き、細長い頸部、丸みのある肩、膨らんだ腹、底近くで窄まり、平底である。肩部に 2 本の凸線文がめぐる。器表はざらざらしており気泡が多い。口、頸部、底部は肩と腹部よりも厚い。高さ 15.4cm、口径 5.8cm、

(18 安家瑶・劉俊喜 [2006b] によると、湖東編組站 21 号墓出土資料。大同市と秦始皇市をつなぐ大秦鉄路建設は 1983 年に政府決定されており、1980 年代から沿線では調査が実施されたようである。この墓の報告は出ていないが、湖東北魏墓群の報告には以下がある [山西省大同市考古研究所 2004]; 山西省文物考古研究所・大同市考古研究所 2014; 同 2018]。

(19 小円環とあるが、馮素弗墓の鴨形器と同様のボタン状円形ガラスであろう。



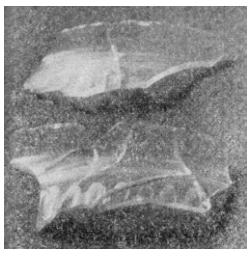
d. 馮素弗墓 (M1:71)

b. 馮素弗墓 (M1:69)

a. 馮素弗墓 (M1:68)

c. 馮素弗墓 (M1:70)

Ⅳ-1. 馮素弗墓 [415 CE]
Tomb of FENG SuFu


Ⅲ-3. 南京大学北園墓
Tomg at BeiYuan of the NanJing University

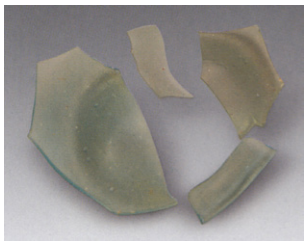
Ⅲ-6. 仙鶴観 6 号墓 (M6:83)
XianHeGuan, tomb №6

Ⅱ-2a. 五里墩 121 号墓 (M121:3)
WuLiDun, tomb №121

Ⅱ-1. 華芳墓 [307CE]
Tomg of FUA Fang

Ⅲ-4. 坪石崗 1 号墓 (M1:29)
PingShiGang, tomb №1 [325 CE]

Ⅲ-7. 富貴山 4 号墓 (M4:23)
FuGuiShan, tomb №4


Ⅲ-2. 来隴東晋墓
Tomb at LaiLong

Ⅱ-3. 煎薬廟 1 号墓 (M1:79)
JianYaoMiao, tomb №1

Ⅲ-5a,b. 象山 7 号墓
XiangShan, tomb №7

Ⅲ-10a. 汽輪電機廠大墓
Tomb found at the factory of NanJing Turbin & Machinery Co, LTD.

Ⅴ. 春城南朝墓 (J444)[439 CE]
Tomb at ChunCheng

Ⅵ-1. 大同南郊 107 号墓 (M107:17)
Southern suburb of DaTong, tomb №107

Ⅷ-1. 新沢千塚 126 号墳
Niizawa senzuka, tomb №126

Ⅷ-2. 伝高屋築山古墳出土
an unexpected find from Takaya Tsukiyama kofun, supposed the mausoleum of Emperor Ankan.

図 1　ガラス容器 1
（中国：三国～劉宋 / 北魏、日本）

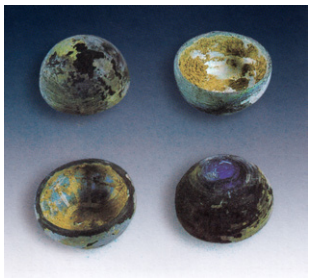
Ⅵ-2. 伊和淖爾 1 号墓
Ikh Nuur, tomb №1

Ⅵ-3. 大秦鉄路湖東編組站 21 号墓
HuDong marshaling yard on the DaQin line, tomb №21

Ⅵ-4 迎賓大道 16 号墓 (M16:4)
YingBin avenue, tomb №16

Ⅵ-5. 七里村 6 号墓 (M6:6)
QiLiCun, tomb №6

Ⅵ-6. 七里村 20 号墓 (M20:1, 2)
QiLiCun, tomb №20



参考 . 迎賓大道 16 号墓 (M16:8)
YingBin avenue, tomb №16

f. 定県石函 90

Ⅵ-7. 定県石函 [481 CE]
Treasures in the stone reliquary box.
(Buried under the HuaTa-pagoda, Ding xian)

e. 定県石函 89

d. 定県石函 88

b,c. 定県石函 87-2,3

a. 定県石函 87-1

Ⅵ-8. 封魔奴墓 [521 CE]
Tomb of FENG MoNu

Ⅵ-9a. 祖氏墓
Tomb of ZU –

g. 定県石函 91

図 2　ガラス容器 2 (北魏)

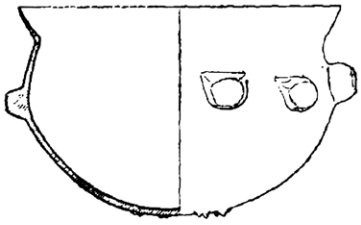
腹径 11.1cm、底径 4.2cm。」[大同市考古研究所 2006b:65]。

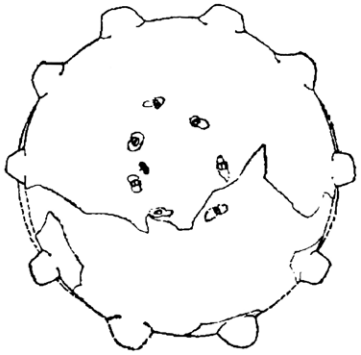
この墓からは、雑器として半球形のガラス器 4 点 (M16:8)(図 2; 参考) も出土している。「淡青色半透明。凹面には白色で七弁花が描かれる。直径 5 ～ 5.5cm、厚さ 0.2cm。」[同 :65]

5, 6. 七里村墓地　山西省大同市　北魏平城期中後期

2001 年に開発に伴い実施したボーリング調査で発見・調査された墓地で、34 基が調査された。6 号墓と 20 号墓の 2 基の墓でガラス容器が出土しているが、この 2 基については詳細報告がない。

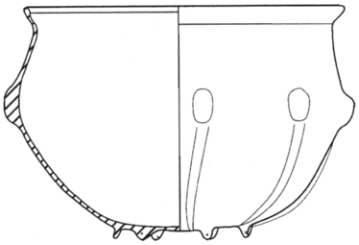
ガラス容器 3 点は、「共にコバルト色。吹きガラスで、内に気泡をやや多く含み、透明度は高くない。M6:6(図 2,4; Ⅵ-5) はガラス碗で、口縁端部は丸く、直立する器壁は下部で窄(すぼ)まる。圏足があり、腹部上部に凸線文 1 周がめぐる。口径 13cm、底径



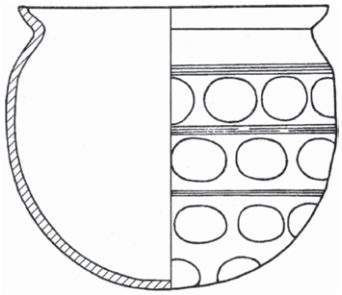


Ⅱ-1. 華芳墓 [307CE]
Tomg of FUA Fang

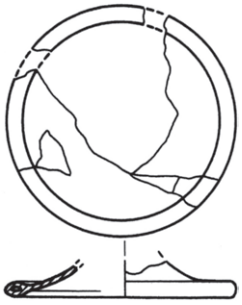
0　5cm



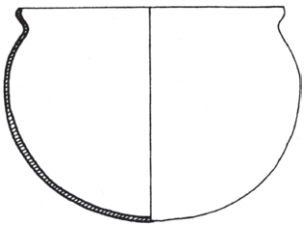
Ⅱ-3. 煎薬廟 1 号墓 (M1:79)
JianYaoMiao, tomb №1



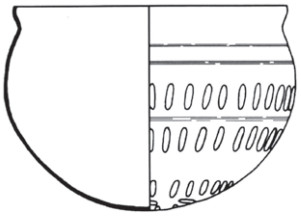
Ⅱ-2a. 五里墩 121 号墓 (M121:3)
WuLiDun, tomb №121

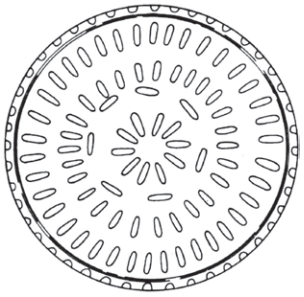


Ⅳ-1e. 馮素弗墓 (M1:72)
Tomb of Feng SuFu

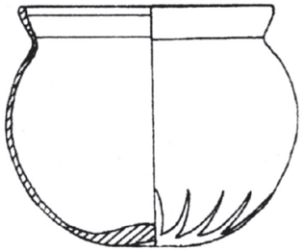


Ⅲ-4. 坪石崗 1 号墓 (M1:29)
PingShiGang, tomb №1

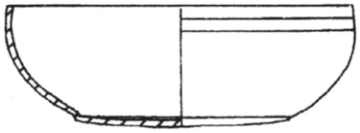




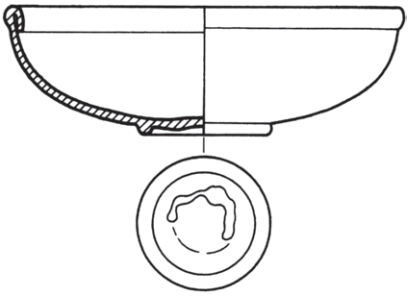
Ⅲ-6. 仙鶴観 6 号墓 (M6:83)
XianHeGuan, tomb №6



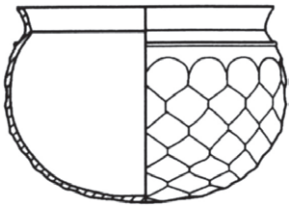
Ⅲ-7. 富貴山 4 号墓 (M4:23)
FuGuiShan, tomb №4



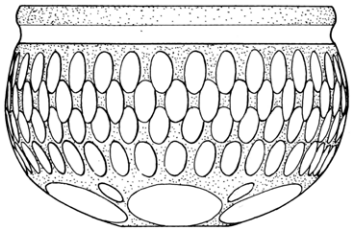
(参考：銀碗 , 富貴山 M4:22)
Silver bowl as a saucer: FuGuiShan, tomb №4

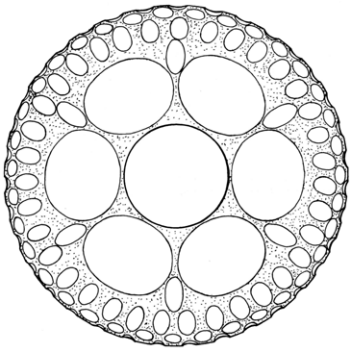


Ⅳ-1a. 馮素弗墓 (M1:68)
Tomb of Feng SuFu

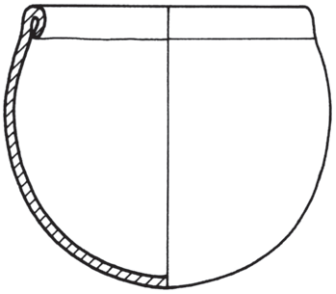


Ⅴ. 江蘇春城墓 J440[439]
Tomg at ChunCheng

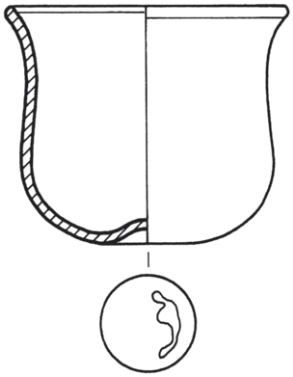




Ⅵ-1. 大同南郊 107 号墓 (M107:17)
Southern suburb of DaTong, tomb №107



Ⅳ-1d. 馮素弗墓 (M1:71)
Tomb of Feng SuFu



Ⅳ-1b. 馮素弗墓 (M1:69)
Tomb of FENG SuFu

図 3　ガラス容器 3
(西晋～劉宋 / 北魏)

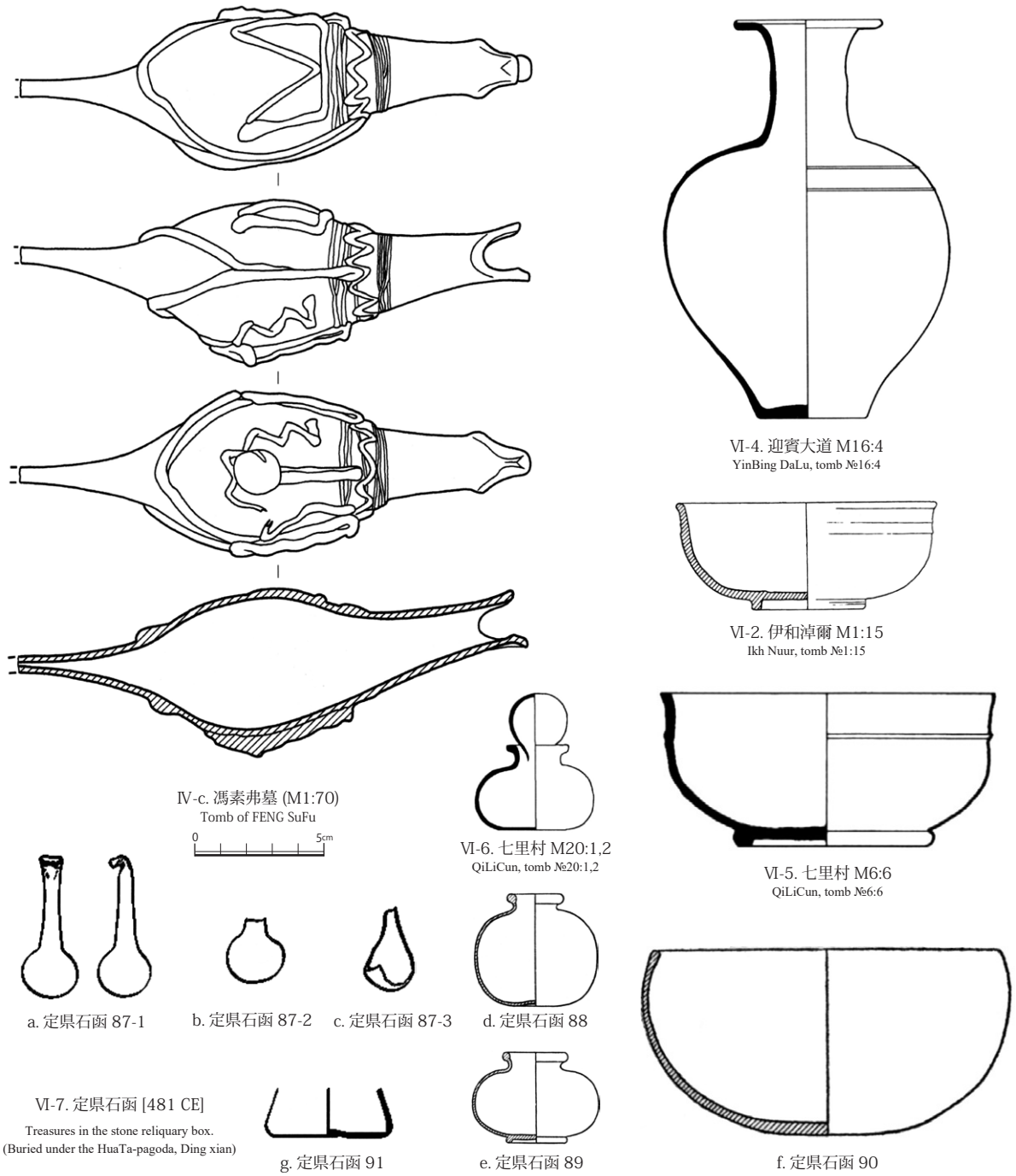


図 4　ガラス容器 4 (北燕，北魏)

7.7cm、高 5.9cm」。底部にポンテ痕がある [安・劉 2006a:554]。

小壺 M20:1(図 2,4; Ⅵ-6) は、「口縁は巻かれ、頸部はくびれ、肩は広く張り出し、丸く扁平な腹、平底である。口径 2.4cm、底径 2,6cm、高 5cm[20]。蓋と推測されている球状の破片 (M20:2) もある。」[大同市考古研究所 2006a:41-42]。蛍光 X 線分析が行われ、3 点とも Na_2O-CaO-SiO_2 と報告されている [21](表 1)。

7. 定県石函　河北省定州市　太和 5 年 [481 年]

1964 年に旧定県県城東北隅の土丘から石灰岩製の石函が出土した。その蓋上には、孝文帝が太和 5 年にこの地へ至り、五層仏塔を造営したことが刻まれていた。石函からは以下のガラス容器 7 点を

(20 図 4 のように小壺と蓋を合わせた通高。

(21 安家瑶・劉俊喜 [2006a:553-554] で「大同市南郊変電站 M20 出土」とある 3 点はこの七里村の 2 基の墓から出土した 3 点に該当する。測定値は安家瑶・劉俊喜 [2006b:39-40] の方に掲載がある。

含む計 5657 件の遺物が出した [河北省文化局文物工作隊 1966]。石函から出土した資料は 2009 ～ 2010 年度に再調査が行われ [岡村ほか 2012; 韓立森ほか 2013]、その際に詳細な観察と蛍光 X 線分析が実施されている [22]。

ガラス容器資料については、鉢 90[23]、小壺 2 点 (88、89)、底部破片 91、瓢箪形小瓶 3 点 (87-1~3) の合計 7 点があると原報告で報告されていた。7 点の資料については、詳細な観察記録が日本語版の科研報告書にあり、下記に再掲するが、新たにこの再調査で明らかになったのは、87 で集合番号になっていた瓢箪形小瓶は報告で図化されていたものの、他に複数点の破片があるということである。

鉢 90(図 2,4; VI-7f) は、「丸底で口縁が内傾する。紺色を呈し、表面が銀化して一部に土が付着しているものの、半透明の器胎には小さな気泡がみえる。熱して水飴状になったガラスを管状の竿の先に付け、風船のように息でふくらませて成形する「吹きガラス」技法で作ったもの。口縁部は熱して仕上げているが、底部の表面があれているため、ポンテ痕ははっきりしない。高さ 7.9cm、口径 13.4cm、胴部最大径 14.7cm、底部の厚さ 0.8cm で、上方へとしだいに厚さを減じて胴部最大径のところで厚さ 0.35cm、口縁部の下では 0.3cm である。内部は底部が銀化し、内外面とも下半部に泥が付着しているのにたいして、上半部はガラス質がよく残っている。これは舎利容器として口を上にして埋納されたのち、石函内に流入した泥に埋もれた下半部が風化したからであろう。」[岡村ほか 2012:54-55]。

小壺 2 点 88,89(図 2,4; VI-7d,e) は、「「吹きガラス技法」でつくった薄手の壺で、頸部は短くたちあがって内折りによる断面円形の小さな口をもつ。いずれも表面の一部が銀化して土が固着しているが、半透明の薄い器胎には小さな気泡が多くみえる。88 は原報告の瓶Ⅰ式で、紺色を呈す。丸い底部は中央がわずかに凹み、球形にふくらんだ胴部をもつ。ポンテ痕は認められない。高さ 4.3cm、胴部最大径 4.9cm、口径 1.8cm、胴部の器壁 0.1cm、重さ 22.90g。89 は原報告の瓶Ⅱ式で、淡青色を呈す。胴部は扁球形で、4 分の 1 ほどが破損している。底部には時計回りにガラス棒を貼りつけて低い圏足としている。高さ 3.6cm、胴部最大径 4.8cm、口径 2.4cm、重さ 13.95g。」[同 :55]。

3 点の瓢箪形小瓶 87(図 2,4; VI-7a~c) は、「原報告の瓶Ⅲ式で、87-1 の 1 点だけ完全な形を保ち、残りの 1 点はばらばらに破損している。いずれも淡青色ガラスだが、ほとんどが乳白色に変質し、頸部の欠損している 87-2 は胴部の表面が層状に剥離している。「吹きガラス」技法で胴部だけを球形にふくらませ、頸部を細長く引き伸ばして成形している。87-1 は口縁部が押しつぶされて屈曲しており、吹き竿から切り離すときに鋏で折り曲げるようにして切断したまま、その後に整形を加えていない。容器としての用をなしていないため、舎利の荘厳具としてつくられたものであろう。高さ 5.3cm、胴部径 2.1cm。破損している 2 点の胴部径も同じ大きさであり、球形の胴部は型づくりの可能性がある。」[同 :55]。

底部破片 91[24](図 2,4; VI-7g) は、「原報告は器底と呼び、盂(う)の一種かとするが、「吹きガラス」技法で作った瓶の底部である。内外面とも風化して土が固着しているが、断面は紺色を呈している。平底の中央部がやや凹み、胴部は内傾しながら 1.7cm の高さまで残存している。胴部最大径 4.8cm、器壁の厚さ 0.1cm。」[同 :55]。

北魏洛陽期

8. 封魔奴墓　河北省衡水市景県　正光 2 年 [521 年] 改葬 [25]

1948 年に盗掘された十八乱冢墳墓群の磚室墓の 1 つで、墓誌より被葬者が封魔奴と判明した墓である。遺物は持ち出され、ガラス器も回収品である。

(22 定県石函のガラス資料については、2002 年に安家瑶が 4 点のサンプルを採取し、北京科技大学冶金與材料史研究所で SEM-EDS 分析が行われている [安・劉 2006a:551-552; An JiaYao 2009]。試料には「吹きガラス残片」とするものも含まれているが (G15,G16)、遺物との対照ができないため、表 1 に含めていない。

(23 番号は報告時の資料番号。

(24 原報告 [河北省文化局文物工作隊 1966:257] は盂(う)の底部と推測し、中国語版再報告 [韓立森ほか 2013:290] では長頸玻璃瓶としている。前者よりは後者の可能性が高いが、底部のみのため破片とした。

(25 墓誌の検討には周錚(しゅうそう) [1991] があり、北魏平城期を宦人(かんじん)として生きた『魏書』列伝第 20 封懿伝中にみえる封魔奴と同一人物である。墓誌によると平城で 483 年に没し、翌年その地に葬られたが南遷に伴い 521 年に改葬。

碗 (図 2,4; VI-8) は「広口平底、低い圏足があり、腹上部には凸線文一周がある。」[張季 1957]。底にはポンテ痕がある [安・劉 2006:551]。高 4.4cm、口径 11.4cm、足径 4.5cm。調査にあたった中国国家博物館に収蔵されており、成分分析の結果は表 1 のとおりである。

9. 祖氏墓　河北省衡水市景県　北魏末以降

同じく 1948 年に盗掘された十八乱冢墳墓群の 1 つで、墓誌蓋「魏故郡君祖氏墓誌銘」が出土したことから祖氏墓と呼ばれている磚室墓である [張季 1957; 中国国家博物館編 2017:18]。

回収された碗 [26](図 2; VI-9) は緑色だが、「内外壁に白色風化層が付着し、腹部には 3 本の波状文様を貼り付けて装飾する。各本 10 個の山があり、3 本は互いに接して網目文を作る。口縁は内に巻かれて丸い口端部を形成し、底部にはガラス棒を輪にして低い圏足を作る。底部にはポンテ痕がある」[安・劉 2006a:551]。高 6.7cm、口径 10.3cm、圏足径 4.6cm。墓の年代は、共伴した青磁仰覆蓮華尊などの年代からみて 6 世紀中葉と推定されている。調査にあたった中国国家博物館に収蔵されており、成分分析の結果は表 1 のとおりである。

Ⅷ. 朝鮮半島

朝鮮民主主義人民共和国

(参考) 安鶴宮址出土　平壌直轄市

報告書では「ガラス装飾品」として報告しているが [金日成総合大学考古学・民族学講座 1973:256]、ガラス容器として言及されたことのある資料であるため補足しておく。平壌市東北郊外の大城山には、山の上には大城山山城、その南側山裾には安鶴宮址が築かれている [27]。ガラス製品 (図 5) は安鶴宮址内の西宮第 4 号宮殿北側の落下した瓦が数段積み重なったその最も下から出土した [28]。報告者は、「ガラスがあった地層は当時の表土層で、その上に積み重なった瓦層は建物が崩落したときに落下したそのままである。ここでは鉄釘 1 点と共に出土しており、高句麗の墓でしばしばみられるようなものである。ガラス装飾品は破損品なので、本来の形を正確に知ることができないが、見たところ簡単な装飾品の一部のようだ。残存長 6cm、厚さ 1.5cm。ガラスは淡い緑色で、透明だが中に小さな気泡が多数ある」と記述している。写真からは容器と判断するのは難しいと考えるが、このガラス製品の形から馮素弗墓の鴨形器との共通性を指摘したものもある [東・田中 1988:295]。

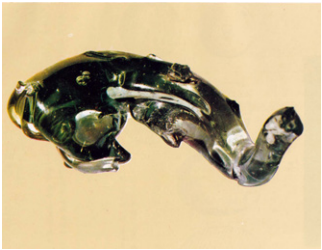


図 5　安鶴宮址出土

大韓民国　慶州北道

1. 安渓里 4 号墳　慶州市月城郡江東面

安渓里古墳群 (안계리고분군) は平坦な尾根上に 200 基あまりが分布する古墳群で、1969 年から貯水ダム建設に伴い 43 基が発掘調査された。4 号墳は新羅特有の墓制である積石木槨墳で、墳丘直径は約 20m、墳丘下には南北二槨が構築されていた。ガラス杯は 3.3m × 1m の北槨内、首飾りに復元できる連なった玉類の末端から南寄りの位置 (被葬者の頸部に近い右側) から出土した [池健吉・趙田典 1981:51]

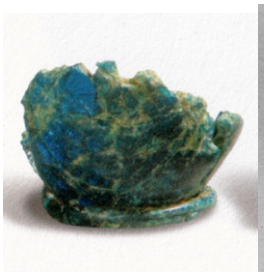
ガラス杯 (図 6,7; Ⅶ -1) は、「文様のないコバルト色のガラス杯である。平らな底の中央が若干上に上がり、底から口まで徐々に広がりながら上に伸びる。口に至ってやや厚くなり、口縁部で丸く収束する。稀に気泡がみられ、杯の片側が若干へこんで

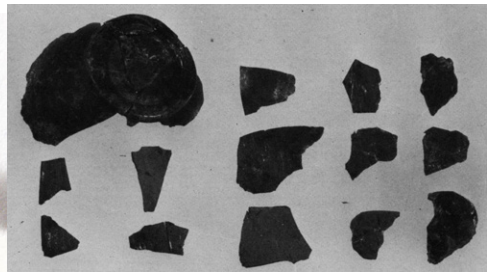
(26 報告のガラス器説明部分では封魔奴墓出土資料と併せて「玻璃碗 2 件」となっているが [李季 1957:33]、祖氏墓の調査経過を報告した部分では「玻璃盌 3 件」とある [同 :30]。安・劉 [2006a:551] によると、形状を保つことができた資料が 1 件のみとある。したがって、点数は現状確かめようがないが、複数点と予想される。

(27 高句麗の王都は王城と背後の山城がセットとなる。高句麗中期の国内城 (山城子山城 - 通溝城) から 427 年に平壌に遷都して以降が高句麗後期で、平壌での前期王都が大城山山城 - 安鶴宮 (現平壌市東北郊)、後期王都が長安城 (現平壌市中心域) である。

(28 安鶴宮は以前そこにあった高句麗古墳を壊して造営されている。報告者の記述をみると、ガラス製品はその破壊された下層古墳に由来するものと考えているようにもとれる。なお、千田剛道は宮址内建物軸線のずれから造営に時期差があった可能性を指摘している (西宮 3 号・4 号宮殿は軸がずれる)[東・田中 1995:220]。

Ⅶ-3-⑦. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam DaeChong, Southern mound





Ⅶ-4d. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam DaeChong, Northern mound

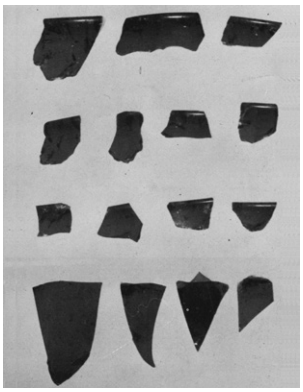
Ⅶ-3-①. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam DaeChong, Southern mound

Ⅶ-3-⑤. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam DaeChong, Southern mound

Ⅶ-3-②,③. 皇南大塚 , 南墳 (右 :②, 左 :③)
HwangNam DaeChong, Southern mound (R:②,L:③)

Ⅶ-3-⑥. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam DaeChong, Southern mound

Ⅶ-7a. 瑞鳳塚 (14359)
SeoPongChong



Ⅶ-4e. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam DaeChong, Northern mound

Ⅶ-3-④. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam DaeChong, Southern mound

Ⅶ-7b. 瑞鳳塚 (14360)
SeoPongChong

Ⅶ-4b. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam DaeChong, Northern mound

Ⅶ-1. 安溪里 4 号墳
AnGyeRi, tomb №4

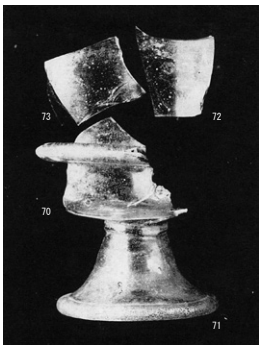
Ⅶ-8a. 天馬塚
CheongMaChong

Ⅶ-2a. 月城路가13 号墳
WolSeong-no, tomb № Ka-13

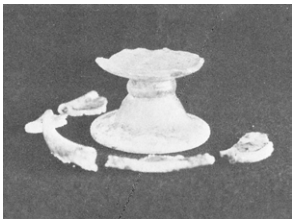
Ⅶ-5a,b. 金鈴塚
GeumRyeongChong

Ⅶ-9. 玉田 1 号墳
OkJeon, tomb №1

Ⅶ-6a. 金冠塚 (69)
GeumGwanChong



Ⅶ-6b. 金冠塚 (70~73)
GeumGwanChong



Ⅶ-8b. 天馬塚
CheongMaChong

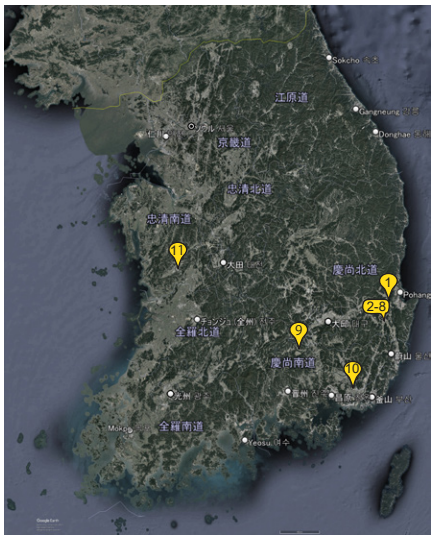
Ⅶ-4c. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam DaeChong, Northern mound

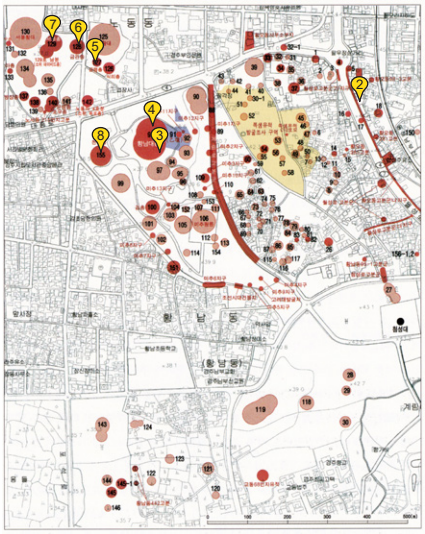
Ⅶ-4a. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam DaeChong, Northern mound

Ⅶ-11. 陵山里
NeungSanRi

Ⅶ-10b. 大成洞
DaeSeongDong

Ⅶ-6d. 金冠塚 (75)
GeumGwanChong



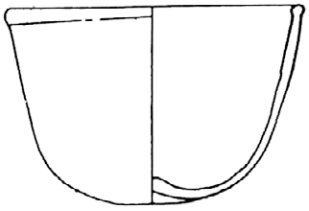


1. 安溪里古墳群　2~8. 慶州市内 (2. 月城路가13 号墳　3. 皇南大塚南墳　4. 皇南大塚北墳
5. 金鈴塚　6. 金冠塚　7. 瑞鳳塚　8. 天馬塚)　9. 玉田古墳群　10. 大成洞古墳群　11. 陵山里

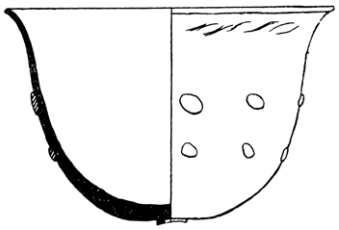
Ⅶ-6c. 金冠塚 (74)
GeumGwanChong

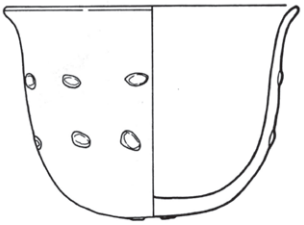
Ⅶ-10a. 大成洞 91 号墳
DaeSeongDong, tomb №91

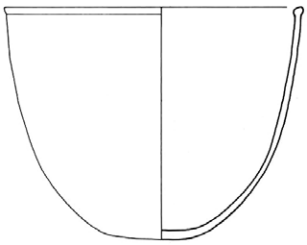
図 6　ガラス容器 5（韓半島）



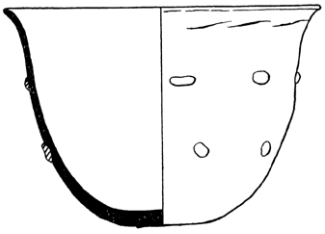
Ⅶ-1. 安渓里 4 号墳
AnGyeRi, tomb №4



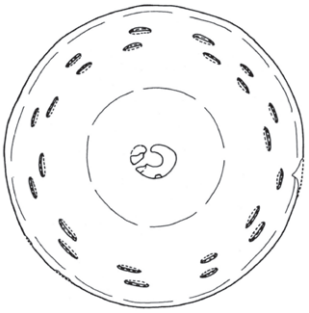




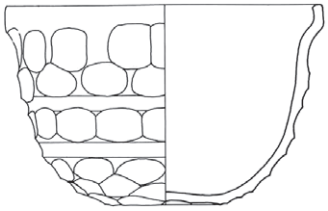
Ⅶ-4b. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam Daechong, Northern mound



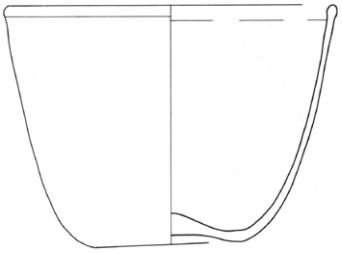
Ⅶ-5a,b. 金鈴塚
GeumRyeongChong



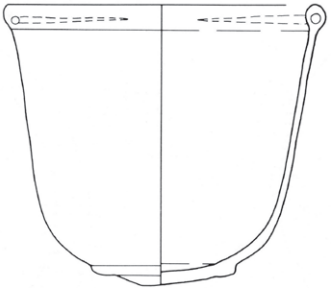
Ⅶ-9. 玉田 1 号墳
OkJeon, tomb №1



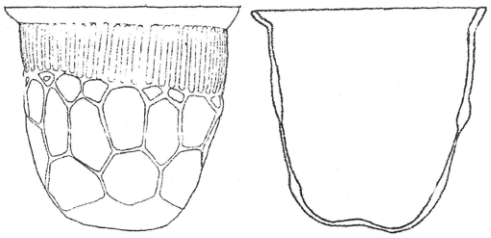
Ⅶ-4c. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam Daechong, Northern mound



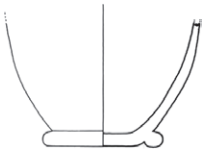
Ⅶ-3-③. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam Daechong, Sorthern mound



Ⅶ-3-②. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam Daechong, Sorthern mound

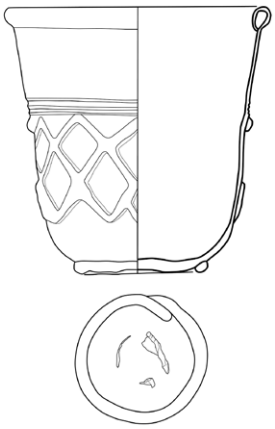


Ⅶ-8a. 天馬塚
CheongMaChong



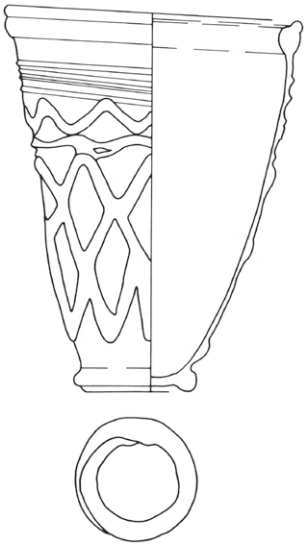
Ⅶ-4d. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam Daechong, Northern mound

Ⅶ-3-⑤. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam Daechong, Sorthern mound

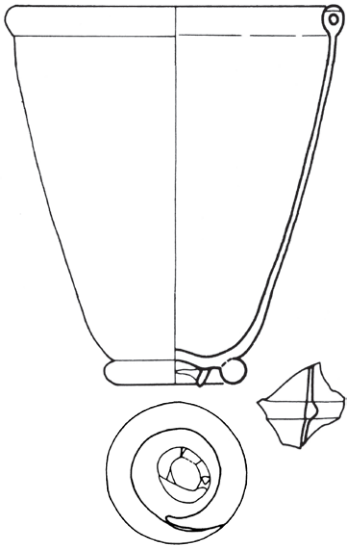


Ⅶ-7a. 瑞鳳塚 (14359)
SeoPongChong

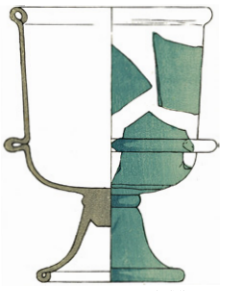
0　5cm



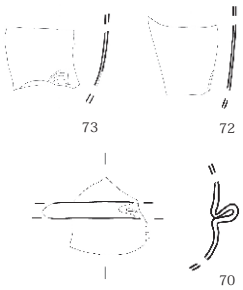
Ⅶ-3-⑤. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam Daechong, Sorthern mound



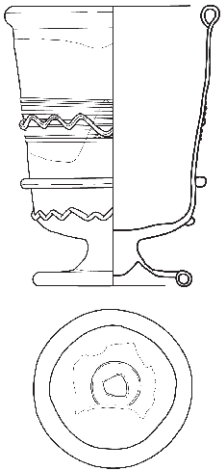
Ⅶ-2a. 月城路가13 号墳
WolSeong-no, tomb № Ka-13



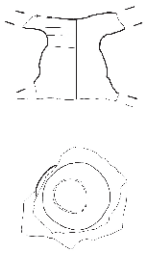
(合成復元 70-73)



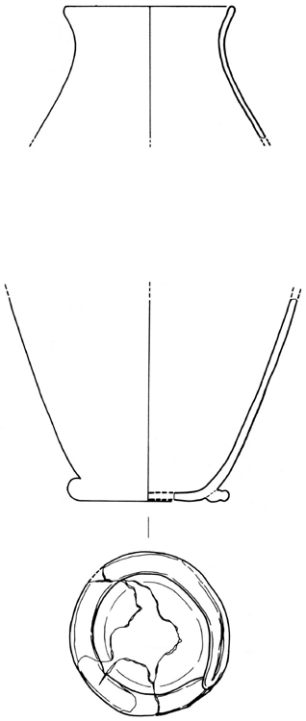
Ⅶ-6b. 金冠塚 (70~73)
GeumGwanChong



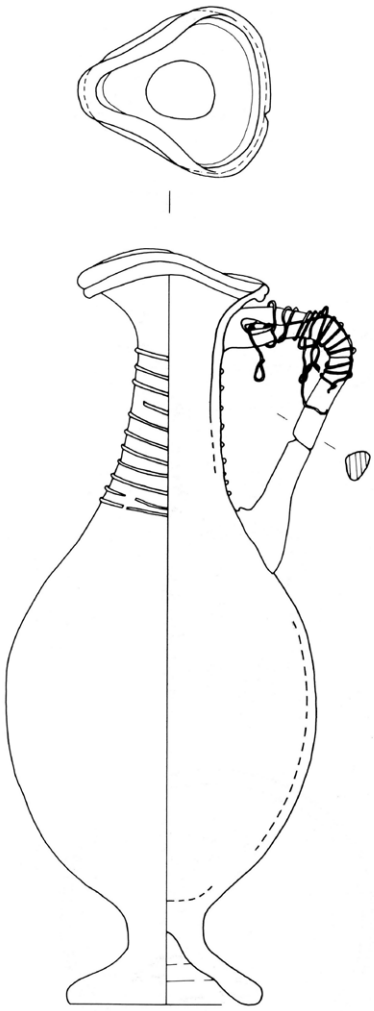
Ⅶ-6a. 金冠塚 69
GeumGwanChong



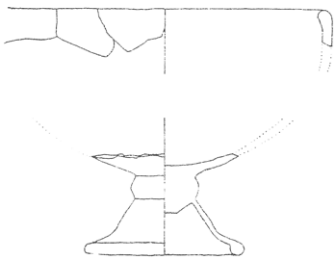
Ⅶ-6d. 金冠塚 (75)
GeumGwanChong



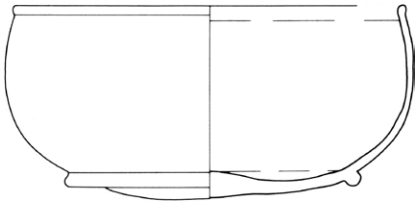
Ⅶ-3-⑦. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam DaeCong, Southern mound



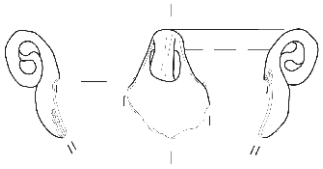
Ⅶ-3-①. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam DaeCong, Southern mound



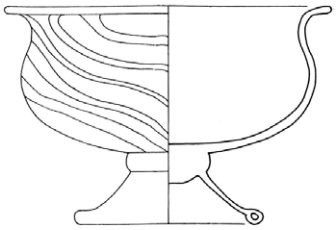
Ⅶ-8b. 天馬塚
CheongMaChong



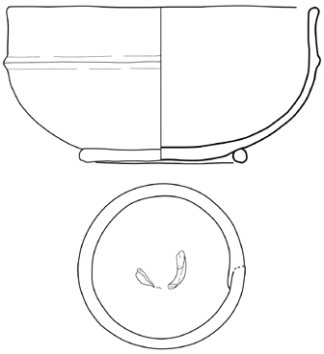
Ⅶ-3-④. 皇南大塚 , 南墳
HwangNam DaeCong, Southern mound



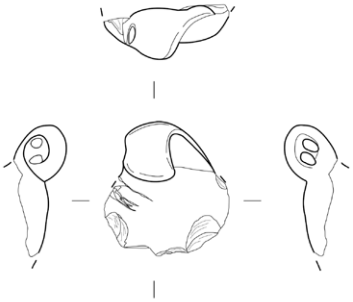
Ⅶ-6c. 金冠塚 (74)
GeumGwanChong



Ⅶ-4a. 皇南大塚 , 北墳
HwangNam DaeCong, Northern mound



Ⅶ-7b. 瑞鳳塚 (14360)
SeoPongChong



Ⅶ-10a. 大成洞 91 号墳
DaeSeongDong, tomb№91

0　5cm

図 7　ガラス容器 7 (朝鮮半島)

いるが、全体の姿は整っている。高 6.5cm、口径 10cm。」[同 :56]。

2. 月城路가 13 号墳　慶州市

月城路古墳群 (월성로고분군) は、1985 年に市街地整備事業の一環として月城路の下水道工事中に発見・調査された古墳群である。

報告によると、ガラス杯は「北 2 号人骨の南側大刀の切先部から南に 30cm の位置で出土した。全部で 2 点分だが、1 点のみが復元され、残りは復元過程で器形等の特徴が分からなかった。復元により器形が分かる 1 点 (図 6,7; Ⅶ -2a) は淡い黄緑色で、器壁に非常に微細な気泡がある。口縁部は断面が円形で、断面中央に直径 3mm の穴ができるように巻き付けている。口唇部は藍色を帯びている。圏足は断面円形のガラス棒を丸くつけて作り、底部中央にもガラス棒を丸く貼りつけた痕がある。表面には幅約 5mm の凸帯を上下それぞれ 2 本ずつ折り返し往復させ、文様効果を作り出している。高 12.5cm、口径 10.7cm。」[国立慶州博物館 1990:168]

3. 皇南大塚 (慶州 98 号墳)[29] 南墳　慶州市

皇南大塚 (황남대총) は皇南洞で最大の古墳 (積石木槨墳) で、2 つの墳丘が重なり合い、南北 114m、東西 82m、高さ 23m の瓢箪形をしていた。1973 年より発掘調査が行われ、墳丘の切り合い関係から、南墳から北墳の順に造営されたことが明らかとなった。南墳は東西に主槨と副槨が並んでおり、ガラス容器は三重になった主槨最内の内槨一端に設けられた副葬品収蔵部より出土した[30]。

注口把手付瓶 ①[31] (図 6,7; Ⅶ -4- ①) は、器高 24.8cm、胴最大径 10.2cm。「副葬品収蔵部内の上央部西側で破損した状態で出土した。淡緑色のガラスで作られており、注口である口縁部は外反しながらまるで鳥の嘴かトランペットのように柔らかく広がる環状口縁に処理されている。コバルト色のガラス帯を口縁下に付け加えている。頸部は細く長く下り、コバルト色のガラス帯を 10 余周ほど平行に回している (trailing 技法)。把手は断面が三角形を帯び、口縁下と肩部に渡し付けており、上段部は S 字形に丸め押し付けている。把手には金線が巻かれているが、何のために巻いたのか、保護するためのものなのか良く分からない。身部は卵形で、下部には小さな台脚が付いており、厚さは約 1.0cm である。」[文化財管理局 1994:123]

ガラス杯は全て副葬品収蔵部内中央西より出土した。杯② (図 6,7; Ⅶ -3- ②) は、「淡い緑色を帯びた杯で、口縁は断面を巻いた環状口縁である。身部には気泡が見られる。底の周縁部分に円形で低い圏足を付けているが、底面の方がより低いので圏足の役割を果たしていない。口縁上部と底部は身部とは異なり、青緑色を帯びている。口径 10.2cm、高 9.3cm。」[同 :123]

杯③ (図 6,7; Ⅶ -3- ③) は「緑色を帯び、口唇は身部の厚さとそれほど差がない。身部は若干の気泡が見えるだけで、何も装飾がなく、底部が内にくぼんでいる。口径 10.7cm、高 7.9cm。」[同 :123]

杯⑤ (図 6; Ⅶ -3- ⑤) は「破片で、一部のみ残っている。淡緑色を帯び、杯②③よりもはるかに透明度が落ち、

(29 統一番号と発掘された遺物や遺構の特徴に基づいて与えられた名称の 2 つがある。また、慶州市内の積石木槨墓の年代については諸意見があるのでここでは明記しない (下表参照)。

	伊藤秋男 (1972)	藤井和夫 (1979)	崔秉鉉 (1992、2000)	李熙濬 (1998)	金龍星 (1998)	李漢祥 (2004)
300			月城路カ30 月城路カ29 月城路カ8 月城路カ5、6	月城路カ8 月城路カ29 月城路カ5、6	月城路カ30 月城路カ31 月城路カ29 月城路カ8	
350	皇南109号(3·4) 皇吾14号		皇南109号(3·4) 月城路カ13 味鄒王陵5区1 味鄒王陵5区6 皇南110号 98号南墳	月城路カ13 皇南109号(3·4) 味鄒王陵5区1、6 皇南110号 月城路ナ13	月城路カ5、6 月城路カ13 皇南109号(3·4)	皇南109号(3·4)
400		皇南109号(3·4) 味鄒王陵5区6 皇吾14号 皇南110号	98号北墳 瑞鳳塚	98号南墳（奈勿） 月城路ナ12	月城路ナ13 味鄒王陵5区1 味鄒王陵5区6	皇吾14（1） 皇南110号 98号南墳
450	瑞鳳塚、金鈴塚 金冠塚 皇南109号(1·2) 皇南83号	98号南墳 皇南109号(1·2) 82号東槨 金冠塚、飾履塚	金冠塚 天馬塚 金鈴塚 飾履塚、銀鈴塚 壺杆塚	月城路カ4 月城路タ5	皇南110号 98号南墳（訥祇） 北墳、金冠塚 天馬塚	98号北墳 金冠塚、瑞鳳塚 飾履塚
500	壺杆塚	82号西槨 天馬塚、金鈴塚 壺杆塚	普門里夫婦塚(積石) 普門里夫婦塚(石室)	壺杆塚	金鈴塚 壺杆塚	金鈴塚 天馬塚 銀鈴塚、壺杆塚 普門里夫婦塚(積石)
550	普門里夫婦塚	普門里夫婦塚	忠孝里1-3号墳 陜城洞石室墳		普門里夫婦塚	普門里夫婦塚(石室)
600						

(30 積石木槨墓の構造や構築方法ついては高久健二 [2018] がある。積石木槨墓の構造については、図 9 天馬塚の例を参照 (基本的に被葬者の頭位は東で、木棺が安置された東側 (頭側) に副葬品収蔵部 (副葬櫃) が配置される)。

(31 ① ~ ⑦は報告書遺物番号。混乱するので a~g に付け替えていない。

多くの気泡を含んでいる。口唇は若干段をつけ、底部は欠失し不明である。口径 10.2cm、現高 5.0cm。」[同 :123]

杯⑥ (図 6,7; Ⅶ -3- ⑥) は「淡緑色の杯で、口縁は内に巻き付けて中空の断面円形で管状の環状口縁で、その上に再びコバルト色のガラス紐をつけて装飾している。身部上段には 4 ～ 5 段の段がつけられており、直下にコバルト色のガラス紐を波状文に 1 周つけて装飾している。その下には底部まで身部と同色のガラス紐を波状に 3 段互い違いに回しつけ、菱形になるように装飾する。その製作技法は注口把手付瓶の環状口縁ならびに trailing 技法と根本的に同一である。やはりポンテを使用した吹きガラス技法で作った胴には均等に小さな気泡が広がっており、砂や石の小さな破片がガラスに混じって黒い傷もみえる。底部には内が詰まった丸く低い圏足を別に付けている。口径 9.5cm、高 12.5cm。」[同 :123,124]

瓶⑦ (図 6; Ⅶ -3- ⑦) は「濃いコバルト色で、器形は杯ではなく小壺形である。身上部が欠失しており良く分からないが、頸部が狭く、口縁は外反する。身部上段の直径が最大とみられるが欠失しており、底部は平底で、周縁に筒状ではなく内までガラスの詰まった低い圏足を別に付けている。外表面には濃いコバルト色に剥離したかのような銀色が全体的に見られる。このようなものは小形のガラス玉にも多くみられるので、国産である可能性もある。口径 5.5cm、底径 5.0cm。」[同 :124]

杯④ (図 6,7; Ⅶ -3- ④) は「収蔵部内中央に置かれた鉄鼎の東南肩上で出土した。濃いコバルト色をした半球形の杯で、口唇は身部に垂直で、突出して帯状になる。身部は金・銀製碗と同一形で、若干丸底の底周縁に断面が円形のガラス棒で作った圏足を付けるが、底の方が下に出ている。現在出土しているガラス玉と材質と色が同一であり、外形は金・銀製碗と同一なので、国産である可能性がある。口径 12.7cm、高 6.3cm。」[同 :124]

なお、皇南大塚南墳から出土したガラス製品の化学分析は金奎虎（キムキュホ）がまず行い [金奎虎 2000]、2019 年にも測定されている (表 2)[金度潤（キムドユン）ほか 2019]。

4. 皇南大塚 (慶州 98 号墳) 北墳　慶州市

皇南大塚北墳の内部構造は主槨のみの二重槨で、ガラス容器は内槨の一端に設けられた副葬品収蔵部で出土した。

ガラス容器は、「副葬品収蔵部西北側部分から大部分壊れた状態で 5 個分が出土した。このうち 3 個は器形の復元が可能であったが、残りは破損がひどく、器形が分からない」[文化財管理局 1985:125]。

高足杯 (図 6,7; Ⅶ -4a) は、「口唇部が外に広く広がり、中間を膨らませて S 字形に曲線をえがく扁平な胴体に、太く低い脚を付けている。口唇部は水平に近く広がり、口唇端部は丸く作られている。脚は胴との境界部分が 0.6cm 幅の太い環になっており、その下から外に広がり、床設置部分を内向きに貼り付け、環を作っている。厚く透明な器壁全面に濃い褐色の木目文があって装飾になっており、気泡はみられない。高 7.2cm、口径 10.7cm、杯部直径 9.7cm、脚高 2.3cm、脚底径 6.2cm、厚さ 0.3cm。」[同 :125-126]。

杯 (図 6,7; Ⅶ -4b) は、「藍色のガラス杯。口唇は外に広がって僅かに突起し、口唇端は丸く作られ、器壁より厚く作られているため縁取りを巻いたようにみえる。胴部は下に行くと窄（すぼ）まる半楕円形で、底は丸底で、床に接地する部分が若干押されてくぼんでいる。器壁は厚く透明度が高いが、表面が滑らかではなく、小さな気泡が器全面に見える。高 7.7cm、口径 9.5cm、厚さ 0.2 ～ 0.3cm。」[同 :126]

切子杯 (図 6,7; Ⅶ -4c) は、「中間が若干膨らんだ半球形の胴、広い口をもつ小型のガラス杯である。口唇は胴との境界部分で折れ、垂直に立ち上がり、口唇上面は平らに作られ、幅は 0.3 ～ 0.4cm と厚い。底は丸底で、床に接地する部分が押されて平らで、中央が若干内にくぼんでる。器表全面にカッティング技法を使用し、胴中間部分とその下に 1cm の間隔をおいて 0.5cm 幅の凹線を削って 3 段に分割し、口部下から底部まで亀甲文に削って装飾している。器面が滑らかで気泡がなく、透明に近い明るい緑色を帯びている。高 6.6cm、口径 9.4cm、厚さ 0.2 ～ 0.4cm。」[同 :126]

杯 (図 6; Ⅶ -4d) は、「低い圏足のあるもので、破損がひどく全体的な器形が不明である。環足は環状で、底が平たい。胴部の形は不明だが、口縁端が丸く処理されており、その約 1cm 下に暗褐色の凸線が 1 周巡ったものであったことが収集された破片から分かる。全体的にコバルト色だが、大部分が酸化して緑色または紫色を帯びており、表面が荒れ、杯全面に小さな気泡がある。圏足高 0.5cm、底径

4cm、厚さ 0.2 ～ 0.4cm。」[同 :126-127]

破片 (図 6; Ⅶ -4e) は、「破損がひどく、器形が全く不明なもので、口唇部と胴部の一部破片のみが少量収集された。口唇部は端が丸く、器表面は滑らかであるが気泡が多い藍色で、杯 (Ⅶ -4b) と同質とみられる。厚さ 0.2 ～ 0.3cm。」[同 :127]

5. 金鈴塚 (慶州 127 号墳)　慶州市

金鈴塚 (금령총) は 1924 年に梅原末治らによって発掘調査が行われた。直径 12m 以上あったとみられる墳丘は人家で半壊状態であったが、木槨は保たれていた。2 点のガラス杯は共に、木槨と棺の間の東側で出土した [32][梅原末治 1931:26, 図版第 37]。

ガラス杯 (図 6,7; Ⅶ -5) はわずかに緑色を帯びた透明で、2 段に青色ガラスの円点が加えられている。底にはポンテ痕がある。梅原は細片を送って成分分析を試みている [同 :132-133][33]。

6. 金冠塚 (慶州 128 号墳)　慶州市

金冠塚 (금관총) は 1921 年に採土によって偶然内部が暴露し、発掘調査された。ガラス器は木槨と棺の間の東側で出土した [32][朝鮮総督府 1924:20, 図 4]。ガラス器は約 9 個と記載されているが [同 1924:29]、十数点の破片を接合して 2 点の台付杯に復元している [同 1924:81]。

高足杯 69[34](図 6,7; Ⅶ -6a) は、「淡い緑色を帯びたガラス杯で、胴の一部と台脚の一部が残存するものを復元した。口縁部は外から内に巻いて、内面に付着させている。口縁部は淡緑色のガラス液と青緑色・暗赤色のガラス液が一緒に巻かれている。胴体にはガラス液を細い糸のように引き、胴中央部に 7 ～ 8 周凸帯を巡らせている。そして凸帯上に波状文のガラス帯を付着させている。胴中央部の文様の下方には、断面円形のガラス帯を付けている。ガラス帯の下方にも青緑色・暗赤色を帯びたガラス帯を波形に巡らせている。台脚端は全て欠失しているが、天馬塚出土品を参考にして復元した状態である。高 9.2cm、口径 6.6cm、底径 4.9cm、現重量 69.1g。」[同 :22]。

高足杯 (70~73)(図 6,7; Ⅶ -6b) は、「淡い緑色を帯びたガラス杯で、大部分が欠失して胴部と底部の一部の全 4 片が確認された。胴部にはガラス液で丸い凸帯を回している。」台脚部の破片 71 は裾部を「直径約 4.7cm に断面円形のガラスを丸めて作ったもので、外底面にポンテ痕が確認される。器面全体に球状の気泡が確認される。」[同 :22]。

なお、国立中央博物館と慶州国立博物館はその後も一部残存していた金冠塚の封墳に注目し、古墳構造と範囲を解明するため 2015 年に再発掘を実施した。その際に下記ガラス片を回収しており、新旧出土ガラス資料については化学分析が行われている [金度潤ほか 2019]。

ガラス片 74(図 6,7; Ⅶ -6c) は「濃いコバルトブルーで、口縁部に該当する。口縁部外縁にガラス帯を巻いて耳を作っている。外面に縦方向に球状の気泡が確認される。現存高 3.6cm。」[同 :22]。

ガラス片 75(図 6,7; Ⅶ -6d) は、「淡い緑色で、台脚の一部である。台脚に球状の気泡が確認される。底部外面に半透明の白色の線が巡っている。現存高 2.6cm。」[同 :22]。

7. 瑞鳳塚 (慶州 129 号墳)　慶州市

瑞鳳塚 (서봉총) は 1926 年に慶東鉄道慶州停車場の改築に伴い封土掘削と発掘調査が実施された。ガラス容器は木槨と棺の間の東側で出土した [朴辰一・沈秀娟 2014:6]。

ガラス杯 (慶 14359)(図 6,7; Ⅶ -7a) は、「淡い緑色を帯びたガラス杯で、胴下部の欠失がひどい。斜めにみえる底は断面円形のガラスを 1 周回して作ったもので、外底面にはポンテ痕の痕が確認される。底部は角のない円盤状で、口縁まで直立するように伸びて若干外反している。口縁は外から内に巻いて作られており、その内部は中空である。胴体の下半部にはガラス液を付着させて連続して菱形文を作り、その上方には 3 ～ 5 周の凸帯を回している。胴部には横方向に並んだ球状の気泡が確認される」[同 :95-96]。器高 8.8cm、現重量 111.2g。

碗 (慶 14360)(図Ⅶ -7b) は、「濃い青色を帯びたガラスで、破損したものを復元したものである。斜めにみえる底は断面円形のガラスを 1 周回して作ったもので、外底面にはポンテの痕が確認される。底部は角のない円盤状で、胴中程まで内湾するが、凸帯を置いた後、口縁まで直立する。胴部には横方向

(32 頭部上方に設けられた副葬品収蔵部で出土したと考えて良いだろう。

(33 中尾萬三 (薬学博士) に鑑定を依頼したものの、微量で定量分析を実施できず。定性分析で鉛を検出せずアルカリを検出したことから、ソーダガラスとみられると報告。

(34 番号は再発掘報告書 [国立慶州博物館 2016] の遺物番号 (新旧両発掘で出土した資料が収録されている)。

に並んだ気泡が確認される」[同 :96]。器高 5.1cm、重さ 89.1g。

8. 天馬塚 (慶州 155 号墳)

天馬塚 (천마총) は 1973 年に学術発掘された。この積石木槨墓は未盗掘であり、ガラス容器 2 件は木槨と棺の間の東側 (被葬者頭部側) に設けられた副葬品収蔵櫃内の東南側で出土した (図 9 Ⅶ-8) [大韓民国文化広報部文化財管理局編 1975:154]。

杯① (図 6,7; Ⅶ-8- ①) は青色透明で円筒形をした杯である。外に向かって開いた口縁部の下には縦縞状の条線文があり、その下には不規則な亀甲文が入る。不規則な亀甲文になるのは、底部に亀甲文・側面の立ち上がり部に縦溝文様の入った吹き型を使って吹いたものを、さらに球状にふくらませたためであると指摘されている [Haberey1966; 由水 1976a:59-61]。高さ 7.4cm、口径 7.8cm。。

高足杯② (図 6,7; Ⅶ-8- ②) は淡緑色をした台脚のついた杯である。口縁部の破片から杯部口径は約 10cm と推定されるが、高さは不明である。杯の下の台脚との境は環を巡らしたように括りがある。台脚の底径は 5.3cm、台脚部の高さ 2cm。

慶尚南道

9. 玉田 1 号墳　陜川郡双冊面　5 世紀中葉

玉田古墳群 (옥전고분군) は長期間継続して形成された伽耶上位階層の古墳群である [35]。1985 年より慶尚大学校博物館によって発掘調査が続いており、ガラス杯が出土した 1 号墳は直径約 21m の墳丘をもつ円墳で、1991 年の第 4 次調査で調査された。内部構造は主槨と副槨が並んであり、ガラス容器は主槨で出土した。主槨には大量の副葬品が詰められており、被葬者足側付近の馬甲の上で口縁部片を発見している [慶尚大学校博物館編 1992:15]。

ガラス杯 (図 6,7; Ⅶ-9) は「明るい黄緑色の透明ガラスで作られた滴文杯である。胴中程には青色のソーダガラスで作った滴文が上段に 12 個、下段に 11 個、2 列互い違いにつけられている。滴文の直径は 0.4 ～ 1.1cm と不定形で、付けられる方向あるいはそれぞれの間隔も一定ではない。口縁直下は器面が部分的に均一ではないが、底面には制作時に生じた円筒形の突起が若干残っている。器壁中には直径 0.1mm 程の気泡が多く含まれており、0.5 ～ 1.0mm 程と大きなものもある。器高 7.1cm、口径 9.7cm。」[同 :106]。

10. 大成洞古墳群　金海市　4 世紀第 2 四半期

大成洞古墳群 (대성동고분군) は 1 世紀から 5 世紀にかけて形成された様々な構造の墓が集まった金官伽耶上位階層の古墳群である。1990 年から学術発掘調査が実施されており、第 7 次調査の大成洞 91 号墓からガラス片が出土している。91 号墓は 8.2m × 4.8m の墓壙を備えた大型木槨墓で、ひどく盗掘を受けていた。

ガラス片 (1074)[36](図 6,7; Ⅶ-10a) は、「ガラス容器片で、濃い青い光を帯びている。片面が耳形に丸く巻かれており、耳中央に棒による穴が 2 つある。残存幅 3.9cm、残存する厚さ 0.8cm、重さ 16.84g。(出土一は南側中央の盗掘坑)」[大成洞古墳博物館 2015:187]。成分分析が行われ、ソーダガラスと言及されている [国立金海博物館 2019:309]。

また、大成洞出土としてガラス片がいくつか報告されている (図 6; Ⅶ-10b)。「表面の曲率と気泡の方向を考慮すると、青色ガラス片は容器の一部であるとみられる。褐色ガラス片は皇南大塚北墳で出土した高足杯 (図 6; Ⅶ-4a) のような容器の一部と推定される。透明ガラス片は勾玉である可能性があるが、垂直に長い気泡もみられ、ガラス杯胴部の装飾部分である可能性もある。伽耶の支配階層もガラス容器を使用していたことを示す資料である」[慶州国立博物館 2021:227]。

忠清南道

11. 陵山里寺址　扶餘郡　567 年建立

陵山里寺は百済泗沘期 (538~660 年) の都・泗沘の羅城と陵山里古墳群との間に位置する寺院である。陵山里寺址の心礎石の上からは「百濟昌王十三季 太歳在丁亥 妹兄公主供養舍利」と刻まれた舎利龕が出土したことから造営の背景と年代が分かる。

遺跡からは褐色の長さ 3cm のガラス片 (図 6; Ⅶ-11) が出土している。「皇南大塚北墳の高足杯 (図 6; Ⅶ-4a) と似た技法で製作した容器の口縁部と推定される。モザイクガラスの容器にも見えるが、ガラス本体に褐色ガラスを螺旋状に巻いて作ったもの

(35 玉田古墳群の古墳は 6 期に区分されており、ガラス杯が出土した 1 号墳は 3 期 (5 世紀中葉) である (1 期は 4 世紀代、2 期は 5 世紀前半、4 期は 5 世紀後葉 ~6 世紀初め、5 期は 6 世紀前半、6 期は 562 年の大伽耶滅亡まで)。

(36 金海国立博物館の収蔵品番号。

と推定される。また、気泡の方向が横に伸びており、吹きガラス技法を使用したことが分かる。扶余陵山寺址は百済の威徳王が 567 年に造営した寺で、このガラス片は百済の支配階層もガラス容器を使用していたことを示している][慶州国立博物館 2021:227]。

Ⅸ. 日本

1. 新沢 126 号墳　奈良県橿原市　5 世紀後半

新沢千塚古墳群は、4 世紀末から 7 世紀にかけての時期の古墳が 600 基以上群集した古墳群である。1962 年から 5 ヶ年計画の学術調査が実施されることとなり、1963 年に 126 号墳は発掘調査された。調査当時 126 号墓は 22m × 16m の長方形の墳丘であった。墳丘中央の竪穴墓壙に割竹形もしくは舟形木棺が安置されており、ガラス碗と皿は被葬者の頭部側、右手側木棺内で棺材に接して重なった状態で出土した [奈良県教育委員会 1977:35]。

ガラス碗 J-37204[37](図 1;VIII-1a, 図 8-1) はやや緑がかった透明である。高さ 6.7cm、口径 7.8cm。側面には互い違いに各段 19 個のカットが 5 段ある。側面のカットからはやや間隔をおいて、底部付近には、底中心側から 4 個、9 個の 2 段のカットがある。図 8-1 で灰色に塗られた粗く削られ直径が小さいカットと、塗りのない美しく磨き上げられたカットがあり、報告者はこのカットの状況と口縁が切り離したままであることから、この碗を仕上げ終了前の未完成品とみている [同 :47-48]。

皿 J-37205(図 1;VIII-1b, 図 8-2) は濃紺色の浅皿である。底にポンテ痕を確認できる。器体からつまみ出した圏足が回っているが、皿の方が下に 2mm ほど出ており、安定性を欠く。口径 14.1 ～ 14.5cm、高さ 3cm。表面には文様の痕跡があるが、装飾方法は明らかになっていない [同 :48-52]。

2 点のガラス資料は成分分析の結果が報告されていたが [小田 1977]、同一サンプルで再度測定されている (表 3)[Abe *et al.* 2019]。

2. 伝高屋築山古墳 (安閑天皇陵) 出土　大阪府羽曳野市　6 世紀

1950 年に再発見された白瑠璃埦で、その再発見の経緯と由来の考察については、石田茂作の報告 [1950] に詳しい。白瑠璃埦 J-36665[38](図 1;VIII-2) は、底面の大きな円形のカットの周囲をまず 7 個の円形のカットが取り囲む 1 段があり、その上に 18 個のカットが 4 段ある。口径 12.1cm、高さ 8.2cm。

3. 大山古墳 (仁徳天皇陵古墳)　大阪府堺市

明治 5 年 [1872] に大山古墳の前方部が崩落し、石室が露出した。現地を実見した古川躬行は、石室内から石棺、甲冑、刀剣、ガラス器が現れたと記し

(37 現在は東京国立博物館に収蔵されており、その収蔵品番号。

(38 現在は東京国立博物館に収蔵されており、その収蔵品番号。博物館収蔵の経緯は徳田誠志 [2020] に詳しい。

図 8　新沢 126 号墳出土ガラス器

ている。ガラス器は 2 点あり、「玻璃、壺の如くして蓋なきもの一つ。白玻璃、皿の如きもの一つ。」であったという [39][加藤 2013]。

X．考察：ガラス器の出土とその背景

今回集成したガラス容器が出土した遺跡をみると、その大半は墓からの出土である。したがって、死者と共に埋葬された特殊な消費の在り方を通して残された資料を見ていることになる。

漢代のガラス容器資料の場合もその全てが墓からの出土であったが、現在確認できるところでは定県石函 [481 年] を嚆矢として、塔の心礎に納められた舎利具の一つとしてガラス容器が出土する。仏教に関連する遺構からガラス資料が出土する例は、この後増加してゆく [40]。

1. 出土した遺跡に関して

ガラス容器が出土した遺跡の分布をみると、漢代の状況と大きく違うのは嶺南地域での出土例の減少である。漢代には、沿岸部に位置する合浦郡治所の合浦 (広西壮族自治区北海市合浦県) 周辺の漢墓群からは多数の資料が出土していた [大谷 2017:66 図 1]。また珠江水系の下流地域 (鬱江 - 潯江 - 西江 - 珠江) の漢墓でも出土がみられた [41]。嶺南地域は漢代以降も引き続き南海交易の重要な中継地点であったはずであるが、地域社会の経済力が低下したのか消費方法が変化したのかその理由は定かではないが、同地域で確認された事例は東晋墓からの 2 例にとどまっている [42]。

今回集成した 3 世紀以降の出土事例をみると、各政権の中心地での出土例が多い。特に出土数が多いのは、東晋が都をおいた建康 (江蘇省南京市) の東晋墓からの出土である。帝陵の可能性が指摘されている南京大学北園晋墓をはじめとして、墓誌の出土から有力貴族の墓地であることが判明する墓や、甬道に木門を備えた規模の大きな墓 [43] からの出土が多い。湖北省鄂州市の場合は、呉の重要拠点であった武昌城 [44] の所在地であり、その周囲に大墓も営まれたことが背景にある。北燕の場合は 1 例ではあるが、北燕の都龍城 (遼寧省朝陽市) 近郊に営まれた皇室成員の馮素弗墓からの出土であり、北魏の場合もやはり都平城 (山西省大同市) 近郊の墓に集中している。各政権の中心地に墓域を設けなければならなかったのかという点については議論があるが、都や重要都市近郊に一定規模の大墓や有力氏族の墓地が営まれる状況があるため上記のように集中する傾向がある。ただし朱瑛培・温睿が指摘するように、ガラス容器が墓から出土するということは財力に富むことの象徴であって、身分等級を表象する性格の

(39『壬申十月大山陵より顕るゝ石棺の考へ』は大阪歴史博物館蔵の本が加藤俊吾 [2013] によって全文翻刻されている (筆跡は古川のものではないという)。仁徳天皇陵前方部崩壊に関する類縁資料は白神典之 [2011]、斎藤忠 [1971] が翻刻含めまとめている。なお、気になる点としては『大山陵崩壊実見記』は「又、玻璃器両個を出現せり。其一、瑠璃色壺の如くにて蓋なし。其一、白色盤の如きもの」[斎藤 1971:16]、黒川真頼『日本玻璃七宝説』は「硝子製の器二箇あり、一つは琉璃色にて壺のごときもの、一つは白色にして皿のごときものなり」[黒川 1910:380] としており、『壬申～』翻刻では単に玻璃であるものが瑠璃色になっている。また、『堺県公文録』には「陶器類」とあることから、白神はこの遺物がガラス器と陶器であった可能性と、陶器であった可能性の 2 つを指摘している [白神 2011:14, 25]

(40 なお、都市空間など生活遺構からガラス容器片が出土するのは唐代以降である (長安城 , 揚州城ほか)。

(41 河口側から上流に向かって南海郡の番禺 (広東省広州市)、蒼梧郡の広信 (広西壮族自治区梧州市)、鬱林郡の布山 (同自治区桂平市) があり、その付近の漢墓で出土している。

(42 嶺南地域で六朝期に墓の数が減少するということではなく、嶺南地域の六朝墓を総合的に分析したものとしては、馬啓亮 [2016] がある。

(43 木製門扉は腐朽して残らないが、図 9 のように門をはめた溝 (門扉槽) が確認できる。南京地区で木門を備えた磚室墓が登場するのは、晋帝室が江南に移って以降、中原の葬制が移植されたことの反映という意見がある。

(44 呉にとって、長江中流の武昌と下流の南京は共に重要であった。211 年より秣陵 (212 年より建業に改称) を中心地としたが、221 年に武昌に遷都、229 年に帝位に就くと共に改元し、再び都を建業に移している。しかしそれ以降も、建業が政治の中心であったのに対して、武昌を中心とする荊州地域は軍事の中心地であり続けた。荊州地区 (鄂州市 , 武漢市) では、本来の身分等級の規格を “僭越” した墓が築かれる傾向があることも指摘されている。[付龍騰 2020]。

ものではない [45][朱・温 2017]。

韓半島における出土状況をみると、慶州市皇南洞を中心として分布する新羅の大型の積石木槨墓群から多数のガラス容器が出土している。例えば大成洞 91 号墳から出土した破片などを容器としてみるか等判断の問題はあるが、近年では新羅だけでなく、百済、伽耶のいずれの国でもガラス器を使用していたと指摘されるようになっている [国立慶州博物館 2021: 227]。

2. 出土状況あるいはガラス器の使用について

ガラス容器の出土状況は、死者と共に埋葬された特異な消費の最終形でしかないため、当時の生活空間の中での使用状況は史料に頼ることになる。

まず出土状況をみると、仙鶴観 6 号墳ではガラス碗の底部には漆托(しったく)の跡があったという (図 9; III-6)。富貴山 4 号墳では銀碗の中にガラス碗が納まった状態で出土しており (図 9; III-7)、異種素材の器皿と共に組み合わせて使用されることもあったと推測される。ガラス容器が組み合わさった状態で出土した例には新沢千塚 126 号墳があるが、元々 1 セットとして作られたものではない可能性を谷一尚が指摘していた [谷一 1985: 127-128]。化学分析の結果、碗がいわゆるササン・ガラス、皿がユーフラテス川以西地域製作のいわゆるローマ・ガラスであり、異なる地で製作されたものが組み合わさっていることが確かめられている [46][Abe *et al.* 2018]。象山 7 号墳のように同一器種が複数点出土する事例もあれば (図 9; III-5)、馮素弗墓や皇南大塚のように 1 点ずつ異なる器種が共伴する事例もあるので、日中韓での出土事例は最終到達地で生まれた用いられ方や改変を受けた形になっていると考えられる。文献史料には、豪奢な生活や宴の描写として多数のガラス容器を並べた場面が登場し [参1]、墓からも複数点が出土している状況を見ると、実際にそのような多数のガラス容器を使用するような状況はあったのだろう。

3. 製作地あるいは伝来ルートに関して

漢代の遺跡で出土したガラス容器には、①鉛バリウムガラス、②カリガラス、③ソーダ石灰ガラスで製作されたものがあった [大谷 2017:71]。①鉛バリウムガラスは中国独自の製法で、前漢前期～中期の 2 基の墓での出土に限られており、大半を占めるのは華南～東南アジア地域で製作されたと考えられる②カリガラスであった。西方で製作され伝来した容器と考えられる③ソーダ石灰ガラスも漢代には 2 例存在したが、今回集成した三国～北魏並行期のガラス容器になると、ほぼ③になる (表 1~3)。現地生産が指摘されている例については後述するが、基本的には西方で製作されたものが伝わってきていると考えられ、その産地と併せて伝来ルートが問題となる。

西方の大秦 [参2]、波斯国 [参3] の産物としてガラスは挙がっており、ガラス碗が西域経由の内陸ルートを通って運ばれてきたことを示唆する史料としては、以下の 2 点がある。西晋の潘尼は瑠璃碗賦で「流沙の絶険を済(わた)り、葱嶺(そうれい)の峻危(しゅんき)を越ゆ」[参4] と賦しているし、『洛陽伽藍記』では、城西の皇族邸宅のあった寿丘里に関連して河間王元琛(げんちん)の豪奢な暮しぶりを述べた部分に「中土には無き所、皆西域より来たれり」[参4] とある。

他方で、いわゆる南海を経由して伝来したことを示唆する文献史料もある。『三国志』呉書・薛綜伝には、薛綜(せつそう)が仕えていた交州刺史呂岱(りょたい)が交代となった際に有能な後任者を求めた上疏文が収録されており、南方の風俗を説明した中に遠方より伝来する宝の 1 つとして「琉璃」の語がみえる [参5]。琉璃 (瑠璃)[47] は登場しないが、魏が南方に近い呉に南方の特産物を求めている記事もある [参6]。後代の東晋貴族墓では、ガラス容器以外にもオウムガイを加工した杯やダイヤモンドを象嵌した指輪など南方産の素材を利用した文物が出土しており (図 9; II-3, III-5)[48]、また

(45 ガラス器が身分の高下を示すものではないという結論には同意するが、身分の低い墓からの出土例として北魏墓を挙げるのは同意できない。磚室墓が一律に上位層の墓とは言えず、例えば北燕・馮素弗墓は石槨墓であるように、各国で墓制は異なることを考慮すべきである。

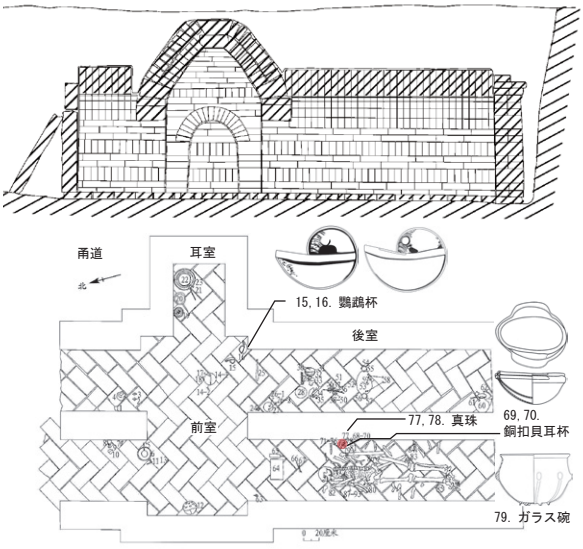
(46 碗が植物灰ガラス、皿はがナトロンガラスである [Abe *et al.* 2018](註 49 参照)。しかし、材質の面でローマ・ガラスといえる皿ではあるが、絵の文様はハート形のモチーフなどササン朝ペルシア的である。

(47 二十四史にみえるガラスを指す言葉の数は小野田伸が数えている [小野田 1999:28 表 1]。

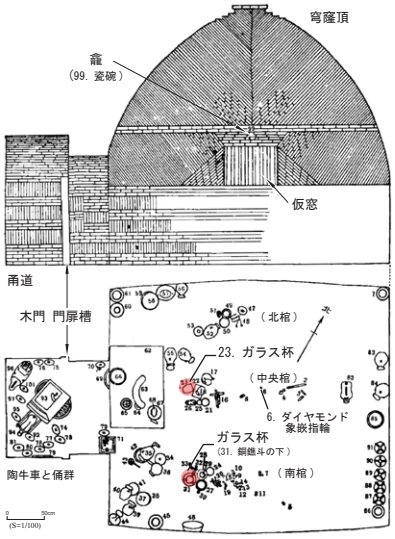
(48 鸚鵡杯は煎薬廟 1 号墓 (図 9 Ⅱ -3)[南京博物院ほか 2018]、象山 7 号墓 (図 9 Ⅱ -5)[南京市博物館 1972] で出土しており、新羅でも皇南大塚南墳 [金鍾佑(キム ジョンウ)

法顕『仏国記』が記すように南海経由で帰国した僧の存在も知られる。さらに南斉では、永明２年 [484] に扶南国王からガラス容器 (琉璃蘇鉢) を献ぜられている [参7]。外来資料であるガラス容器の出土状況から中華分裂期の諸国の対外交渉やモノの動きの特徴が見えてくることを期待して資料を集成したが、伝来ルートが内陸経由なのか南海経由なのかをより明確にできるような点は、現在のところ分布と出土状況からは見つけることができていない。現状は、どちらのルートも存在しており、遺跡の地理的位置からどちらの可能性が高いかを推測していると言って良いだろう。

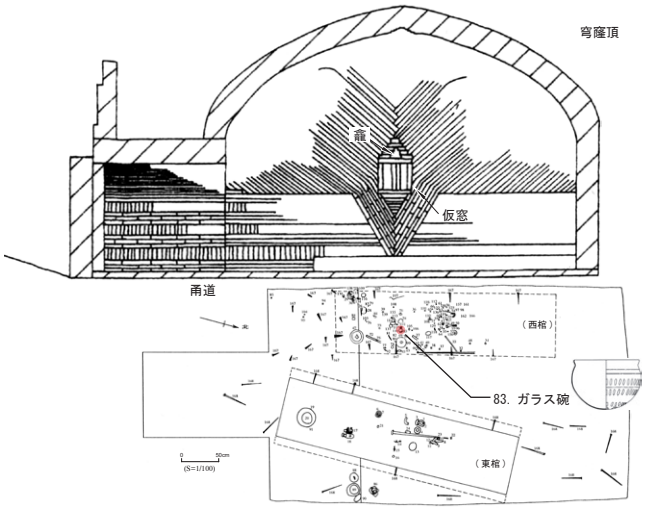
2019]、北墳でも出土している。ダイヤモンド象嵌指輪は象山７号墓。



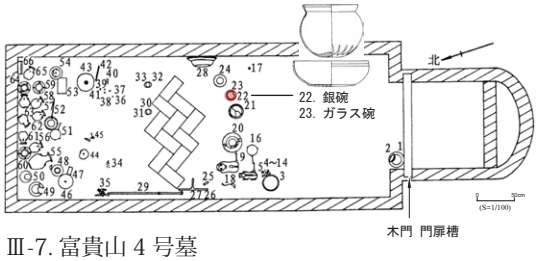
西晋　Ⅱ-3. 煎薬廟１号墓



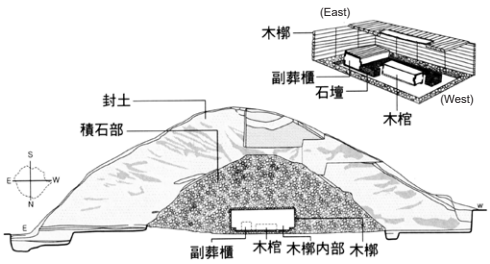
東晋　Ⅲ-5. 象山７号墓



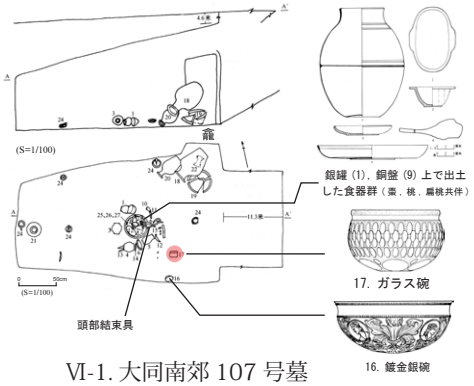
Ⅲ-6. 仙鶴観６号墓



Ⅲ-7. 富貴山４号墓



新羅　Ⅶ-8. 天馬塚



北魏　Ⅵ-1. 大同南郊 107 号墓

図９　ガラス容器が出土した墓と出土位置 (東晋の磚室墓，北魏の洞室墓，新羅の積石木槨墳)

表 1　分析結果一覧 (三国～北魏 / 劉宋)

番号			遺跡名	器形	写	図	年代		SiO_2	Na_2O	K_2O	CaO	MgO	Al_2O_3
Ⅰ	1		鄂鋼飲料廠 M1 棺 :5	破片	-	-	呉中期 [249?]	-						
Ⅱ	1		王浚妻華芳墓	碗	○	○	西晋・永嘉元年 [307]	Na_2O-CaO-SiO_2	64.33	16.03	4.19	7.25	2.45	1.24
									65.36	17.05	4.13	7.1	3.56	1.76
	2	a	五里墩 M121:3 (鄂城 M4021:3)	碗	○	○	西晋前期	Na_2O-CaO-SiO_2	64.22	17.51	3.59	9.19	3.21	1.64
		b	鄂城 M4021:4 (五里墩 M121:4)	碗 (破片 1)	-	-		-						
	3		煎薬廟 M1:79	碗	○	○	西晋	-						
Ⅲ	1		獅帯崗 M5:18	破片 (碗か杯)	-	-	西晋晩期～東晋初期	Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2	65.99	17.63	0.74	1.24	9.22	5.18
									65.82	17.11	0.21	0.47	9.17	7.22
	2		東隴東晋墓	破片	○	-	東晋初年	Na_2O-CaO-SiO_2	61.86	19.17	3.97	8.92	4.38	0.71
	3		南京大学北園墓	碗	○	-	東晋前期 [323?]	Na_2O-CaO-SiO_2	69.39	19.60	0.49	6.81	0.27	1.89
	4		坪石崗 M1:29	碗	○	○	東晋・太寧 3 年 [325]	-						
	5	a	象山 7 号墓	杯	○	-	東晋前期	-						
		b		杯	○	-								
	6		仙鶴観 M6:83	碗	○	○	東晋前期	-						
	7		富貴山 M4:23	碗	○	○	東晋前期	-						
	8		上坊李村東晋墓	杯 (破片)	-	-	東晋前期	-						
	9		石門坎東晋墓	破片 (碗皿類)	-	-	東晋前期	-						
	10	a	汽輪電機廠大墓	杯	○	-	東晋中・後期 [361?]	Na_2O-CaO-SiO_2	68.41	18.82	0.38	5.80	1.00	2.20
									67.70	19.23	0.45	6.05	0.94	3.43
		b		破片 (藍色)	-	-		Na_2O-CaO-SiO_2	69.95	16.10	0.27	5.72	0.63	2.09
									69.15	15.84	0.33	5.79	0.55	2.09
Ⅳ	1	d	遼寧馮素弗墓 M1:71	碗	○	○	北燕・太平 7 年 [415]	Na_2O-CaO-SiO_2	64.82	16.02	4.43	6.14	2.35	2.71
		e	遼寧馮素弗墓 M1:72	脚部？	○	-		-						
Ⅴ	1		春城墓 J440	碗	○	○	宋・元嘉 16 年 [439]	-						
Ⅵ	1		大同南郊 M107:17	碗	○	○	北魏平城期 (南郊 3 期)	-						
	2		伊和淖爾 M1:15	碗	○	○	北魏平城期	Na_2O-CaO-SiO_2	68.04	**	2.70	4.52	2.73	2.93
									71.88	**	2.65	4.48	3.59	3.17
									73.99	**	2.76	4.68	3.93	3.60
									75.85	**	2.88	4.75	4.73	4.30
									56.34	**	2.43	4.13	2.60	2.53
									62.21	**	2.39	4.34	4.21	2.79
	3		大秦鉄路湖東編組站 21 号墓	不明容器	○	-	北魏平城期	-						
	4		迎賓大道 M16:4	壺	○	○	北魏平城期	Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2	55.95	11.11	4.73	10.98	1.55	6.98
									56.69	11.31	4.99	10.39	1.51	6.04
	5		七里村 M6:6	碗	○	○	北魏平城期	Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2	72.94	0.53	0.43	7.39	0.77	8.71
	6		七里村 M20:1,2	壺	○	○	北魏平城期	Na_2O-CaO-SiO_2	80.72	0.91	3.26	6.52	1.9	2.23

* 李軍・羅海明 [2006] が羅宗真 [1994:219] を引いて「南京象山東晋墓杯残片」として掲載する測定値は、汽輪電機廠大墓 a の北京建築材料研究院測定値と同一。羅宗真 [1994] が汽輪電機廠大墓の測定値を象山王氏墓 (象山 M7) の測定値と取り違えたと思われる。王志高 [2011] は南京地質砿産研究所が測定した測定値を汽輪

(Wt%)

MnO	Fe_2O_3	CuO	PbO	BaO	その他成分	出典 (初出)	備考	
	0.26					安家瑶 1986a	定量分析 (中国社会科学院考古研究所化験室)	
	0.18						定量分析 (建築材料設計院)	
0.04	0.57	0.02				建築材料研究院ほか 1984		
						広州市文物管理委員会 1996	EPMA(中国社会科学院南海海洋研究所)	測定 1(打点)
								測定 2(走査)
0.04	0.50	-			TiO_2 0.06, SO_3 0.30, P_2O_5 0.26	李軍・羅海明 2006	XRF(波長分散型 ,W-1800 型 , 溶片法 , 中国科技大学)	
					Sb_2O_2 0.29	建築材料研究院ほか 1984	定量分析	
						李・羅 2006(羅宗真 1994) *		
1.34	0.63				P_2O_5 0.09, TiO_2 0.080, S 0.04, H_2O^+ 0.34, H_2O^- 0.24	南京市博物館 1983	南京地質鉱産研究所	
1.63	0.58	0.02					北京建築材料研究院	
0.002	1.17				P_2O_5 0.07, TiO_2 0.099, S 0.04, Co 0.084, Cu 0.22, Pb 0.24, H_2O^+ 2.00, H_2O^- 1.29		南京地質鉱産研究所	
0.03	1.22	0.27					北京建築材料研究院	
0.08	0.82	0.02				建築材料研究院ほか 1984	定量分析 (建築材料研究院)	
0.01	1.64	1.08	0.63	0.00		馬麗亜 艾海堤ほか 2017	XRF(携帯型測定器 ,Niton™ XL3t GOLDD+)	測点 351: 口縁 (外)
0.00	2.02	1.10	0.64	0.00				測点 352: 口縁 (外)
0.00	1.41	1.13	0.65	0.00				測点 354: 口縁 (外)
0.00	1.45	1.11	0.65	0.00				測点 355: 下腹部 (外)
0.03	1.78	1.09	0.68	0.02				測点 357: 圏足
0.02	1.36	1.01	0.63	0.01				測点 358: 底部 (外)
	1.36	3.19	2.84		P_2O_5 0.69, TiO_2 0.56	AN JiaYao 2009: 382	SEM-EDS(北京科技大学)	
	1.35	3.34	3.07		P_2O_5 0.63, TiO_2 0.57			
0.06	2.81	2.25			SnO_2 1.97, TiO_2 0.68, PbO_2 1.47	安家瑶・劉俊喜 2006b	XRF(国家博物館文物科技保護部 , 姚青芳)	
0.12	1.24	2.08			PbO_2 1.01			

電機廠大墓のものとし、北京建材研究院が測定した同遺物の値を象山東晋墓 (象山 M7) の測定値としているが、これも誤りであろう。(王志高 [2011] ほかを引く員雅麗・馮鋼 [2020: 表 2] では墓と測定値がさらに混乱している。)

** 測定機器の検出できる範囲が Mg~U であるため、Na は対象外で区分できていない。

（表１　つづき）

番号			遺跡名	器形	写	図	年代		O	Na	Mg	Al	Si
Ⅳ	1	a	遼寧馮素弗墓 M1:68	盤	○	○	北燕・太平 7 年 [415]	Na_2O-CaO-SiO_2		6.52	1.05	5.91	62.99
		b	遼寧馮素弗墓 M1:69	碗	○	○		Na_2O-CaO-SiO_2	50.59	1.638	0.374	2.36	32.978
		c	遼寧馮素弗墓 M1:70	鳥形容器	○	○		Na_2O-CaO-SiO_2	57.815	2.895	0.795	1.735	29.215

番号			遺跡名	器形	写	図	年代		S	Cl	K	Ca
Ⅵ	7	a	定県石函 (87-1)	瓢箪形小壺	○	○	北魏・太和 5 年 [481]	Na_2O-CaO-SiO_2	9943		18191	64488
		b	定県石函 (87-2)	瓢箪形小壺 (破損)	○	○		-				
		c	定県石函 (87-3)	瓢箪形小壺 (破損)	○	○		Na_2O-CaO-SiO_2	1700		23258	37431
		d	定県石函 (88)	小 壺	○	○		Na_2O-CaO-SiO_2	1443	1368	23815	21838
		e	定県石函 (89)	小壺	○	○		Na_2O-CaO-SiO_2	1979		23023	14892
		f	定県石函 (90)	碗	○	○		Na_2O-CaO-SiO_2	2517	1217	22512	26805
		g	定県石函 (91)	底部破片 (瓶？)	-	○		-				

番号			遺跡名	器形	写	図	年代		Si	S	Cl	K	Ca
Ⅵ	8		封魔奴墓	碗	○	-	北魏・正光 2 年 [521]	Na_2O-CaO-SiO_2	+++		++	++	+++
	9	a	祖氏墓	網文碗	○	-	北魏	Na_2O-CaO-SiO_2	+++		++	++	+++
		b		碗？	-	-							
		c		碗？	-	-							

しかしながら、北魏に関しては現地生産された資料の存在が指摘されるようになってきている。『魏書』西域伝大月氏国条には、世祖拓跋燾（たくばつとう）の世 [424~452 年] の事として、大月氏国の人が京師 (山西省大同市) で五色瑠璃を鋳て、その後ガラスの貴少さが失われたことを記す（参8）。ガラス製造に関する遺物は発見されておらず、また成分の特徴から北魏生産の可能性ができるほどの測定数の積み上げがないが、迎賓大路 M16:4(図 2,3 Ⅵ -4) は北魏平城期の典型的な土器と器形が似ていることから現地で製作された資料と指摘されている [大同市考古研究所 2006b:71]。

また新羅に関しても、皇南大塚南墳の杯④と瓶⑦は、国産と考えられるガラス玉と材質、色調、銀化の点で類似することから国産の可能性が指摘されている [文化財管理局 1994:124]。ガラスを素材とした器物は器（うつわ）だけではないので、ガラス製造技術の移入を明らかにするためには様々なガラス製品を見る必要があり、これは今後の課題となる。

最後に付け加えると、北魏平城期の墓の発掘調査例が増加し、また北燕の重要遺跡である馮素弗墓の発掘調査報告書が刊行されたことは、中国北部ならびにその先の韓半島、日本への伝播ルートを考える上で重要である。馮素弗墓のガラス容器については、柔然を介したいわゆる草原のシルクロード経由で伝わった可能性が指摘されており [劉寧 2015]、北魏を含めた地域の動向が韓半島や日本に反映されている可能性がある。

4. いくつかのガラス容器器種について

■突起装飾碗

突起装飾のある碗は、西晋代の 2 基の墓で出土している。華芳墓の碗は腹部の大突起と底部の小突起のみであるのに対して、煎薬廟 M1:79 は大突起の下方に龍骨状突起が加わるという違いはあるものの、同様の碗は深井晋司のハッサニ・マハレ遺跡の発掘調査で出土しており、類例も集成されている [深井 1965; 1973]。その製作は吹きガラス技法で器を作り、表面を持ち出すことで突起を作ったと推測している。特に小突起に着目すると、その中央が引き出すための鉗子（かんし）の痕なのか貫通するように窪むという特徴は華芳墓と煎薬廟の 2 資料でも確認でき、この特徴がある資料については類例資料としてみて良いだろう。

■切子装飾碗

今回集成した三国から北魏期の出土資料に限ると、器表に切子装飾がある器は、象山 7 号墓出土のような口径の小さな砲弾形の杯、口縁部の下に括（くび）

S	Cl	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	出典 (初出)	備考
2.867	2.197	9.89	6.26			2.323		蘇会和ほか 2015	SEM-EDS (中国科学院金属研究所)
0.736	1.024	3.266	3.37	0.302		1.648	1.708		
0.285	0.555	3.40	2.705			0.605			

*** 測定機器の検出できる範囲が原子番号 15 の P 以上であるため、2010 年 12 月に別の測定機器を用いて再度測定が行われている [岡村ほか 2012:43]。ただし、その成果報告は 2023 年時点でまだ公表されていない。

Ti	Mn	Fe	Cu	Sr	Zr	Ag	In	Sn	Pb	出典 (初出)	備考
		5006	5946							岡村ほか 2012; 韓立森ほか 2013	XRF(INNOV-X, α2000),FPM(Fundamental parameter method) 自動定量計算システムによる測定値 (ppm)***
		7219	7387						1059		
		12111	2947								
		5237	10041					2298	5327		
		6144	13486					1882	6762		
		6809	9927					2571	5570		

Ti	Mn	Fe	Cu	Sr	Zr	Ag	In	Sn	Pb	出典 (初出)	備考
	+	+	+	+		+	+			范世民・周宝中 1982; 同 1983; 建築材料研究院ほか 1984	XRF, 定性分析 (清華大学工程物理系 , 張日清・曲長芝)
		+	+	+	+	+	+	+	+		

れがある広口の丸い胴部の碗、括れのない広口の碗の 3 種に大別できる。括れのない広口の碗は韓半島と日本で出土しているが、皇南大塚北墳の器は最大径が口径であるのに対して、伝高屋築山古墳と正倉院の碗は口部で再び窄(すぼ)まっており、器形は異なっている。

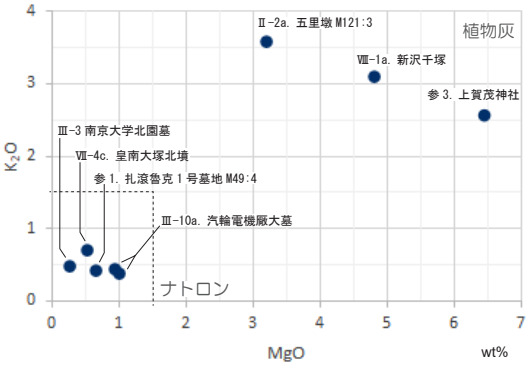


図 10　アルカリ成分の比較

No.	資料名	MgO	K_2O
II-2a	五里墩 M121:3	3.21	3.59
III-3	南京大学北園墓	0.27	0.49
III-10a	汽輪電機廠大墓	1.00	0.38
		0.94	0.45
VII-4c	皇南大塚北墳	0.53	0.71
VIII-1a	新沢千塚	4.81	3.10
参考 1	扎滾魯克 1 号墓地 M49:4	0.66	0.42
参考 2	韓祖念墓		2.14
参考 3	上賀茂神社	6.44	2.58

＊参考 2 は高足杯で器種が異なり、参考 3 は浮出し切子装飾でカットの方法が異なる。

化学分析が実施された資料は多くないが、③ソーダ石灰ガラスの融剤として使われたアルカリ源の違いをみると [49]、五里墩 M121:3 と新沢千塚の切子装飾碗が植物灰、その他がナトロンをアルカリ源としていると推測される (図 10)。植物灰を使用したものをササンガラスであるとすると、五里墩 M121:3 の切子装飾碗は東方では特に年代の古い出土例となり、注目される。

■鴨形器など横置きと考えられる用途不明資料

馮素弗墓で出土した鴨形器 (M1:70) の類例は安家瑶が集めている [安家瑶 2015: 227-230]。形に差があるためどこまで同類とみるかにもよるが、鳥形器とみた欧州出土資料の中に残存した内容物か

(49 ソーダ石灰ガラスを作るために融剤として古代に使用されたアルカリ源には、ナトロンと植物灰の 2 種類がある。ナトロンは炭酸ナトリウムと炭酸水素ナトリウムが主成分で、その他のアルカリ成分 (マグネシウム Mg, カリウム K) をほとんど含まないのに対して、植物灰は植物が Mg や K といったナトリウム (Na) 以外のアルカリ成分を多く含む。そのため、どちらをアルカリ源にしているかはガラス中の酸化マグネシウム (MgO) と酸化カリウム (K_2O) の含有量の差で判断できる。ナトロンを用いた MgO と K_2O が共に 1.5wt% 以下のものがいわゆるローマ・ガラスで、それ以上の値を示す植物灰を用いたものがいわゆるササン・ガラスである。

表 2　分析結果一覧 (韓半島)

番号			遺跡名	器形	写	図		SiO_2	Na_2O	K_2O	CaO	MgO	Al_2O_3	P_2O_5	TiO_2	MnO
Ⅶ 新羅	1		安溪里 4 号墳	杯 (慶 4668)	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	69.2	16.4	0.67	6.97	0.88	2.44	0.12	0.338	0.223
	2	a	月城路 가 -13 号墳	杯 (慶 5865)	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	64.8	15.0	5.22	6.37	1.79	3.81	0.38	0.104	0.048
								66.1	14.0	5.36	6.46	1.57	3.40	0.47	0.101	0.050
								66.9	15.0	4.79	6.06	2.55	3.04	0.50	0.059	0.050
								70.7	12.2	5.54	5.55	1.60	2.88	0.37	0.058	0.054
		b		破片	○	-										
	3	a	皇南大塚 南墳	①注口把手付瓶	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	65.9	17.2	3.7	7.1	3.2	0.98	0.15	<0.1	<0.1
							Na_2O-CaO-SiO_2	63.1	18.2	3.9	6.1	3.0	2.0		0.13	<0.1
		b		②杯	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	63.1	17.0	5.1	6.7	1.9	3.1	0.18	0.12	<0.1
		c		③杯	○	○										
		d		④碗 (慶 3325)	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	61.9	17.5	3.9	6.2	3.3	1.3	0.13	<0.1	<0.1
								62.3	18.6	3.70	5.96	2.75	2.16	0.38	0.092	0.043
		e		⑤片 (慶 3326)	○	-	Na_2O-CaO-SiO_2	70.2	14.4	4.39	5.43	2.15	2.29	0.29	0.065	0.031
		f		⑥杯	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	63.6	17.5	5.0	5.6	1.8	2.8	0.24	<0.1	<0.1
		g		⑦瓶 (慶 3327)	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	69.0	14.7	3.00	4.78	2.23	2.73	0.53	0.095	0.510
								68.2	14.9	3.36	5.20	2.24	2.29	0.43	0.096	0.628
		?		破片 (無色)	-	-	Na_2O-CaO-SiO_2	64.1	19.0	4.2	6.1	2.8	1.0	0.21	<0.1	<0.1
		?		破片 (青色)	-	-	Na_2O-CaO-SiO_2	61.6	19.9	3.9	4.9	2.4	1.9	0.37	<0.1	0.48
		?		破片 (慶 3326)	△	-	Na_2O-CaO-SiO_2	67.4	16.1	3.16	4.95	2.19	2.50	0.40	0.097	0.563
		?		破片 (慶 3326)	△	-	Na_2O-CaO-SiO_2	71.6	15.8	0.49	5.98	0.79	2.27	tr	0.132	0.071
	4	a	皇南大塚 北墳	高足杯	○	○										
		b		杯	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	70.8	15.6	0.51	7.14	0.87	1.99	0.17	0.157	0.080
		c		切子杯	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	69.3	14.1	0.71	10.12	0.53	3.11	0.14	0.070	1.342
		d		底部片 (杯 ?)	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	66.6	17.0	3.09	4.94	2.08	2.73	0.35	0.104	0.490
		e		破片 (杯 ?)	○	-	Na_2O-CaO-SiO_2	70.7	16.2	0.61	6.82	0.83	2.15	tr	0.151	0.079
	5	a	金冠塚	高足杯 (69)	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	65.6	15.7	3.95	7.14	2.07	3.67	0.33	0.108	0.067
								64.3	16.4	4.22	6.98	1.98	3.48	0.27	0.101	0.100
		b		高足杯 (70-73)	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	70.0	12.2	4.11	6.61	1.55	3.66	0.37	0.084	0.063
								69.6	12.5	4.19	6.58	1.48	3.88	0.27	0.079	0.061
								68.4	14.1	4.06	6.53	1.57	3.65	0.27	0.076	0.061
								70.4	12.1	4.14	6.65	1.44	3.69	0.21	0.082	0.060
		c		破片 (74)	○	○										
		d		高足杯脚部 (75)	○	○										
	6	a	金鈴塚	雫文碗	○	○	ソーダガラス									
		b		雫文碗	○	○										
	7	a	瑞鳳塚	杯 (慶 14359)	○	○										
		b		碗 (慶 14360)	○	○										
	8	a	天馬塚	杯	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	69.9	16.1	0.66	7.71	0.93	2.30	0.13	0.138	0.032
		b		高足杯	○	○										
	9		玉田 1 号墳	雫文杯	○	○										
Ⅶ 伽耶	10	a	大成洞 91 号墳	破片 (金 1074)	○	○	Na_2O-SiO_2									
		b	大成洞	破片	○	-										
Ⅶ 百済	11		陵山里	破片	○	-										

表 3　分析結果一覧 (日本列島)

番号			遺跡名	器形	写	図		SiO_2	Na_2O	K_2O	CaO	MgO	Al_2O_3	P_2O_5	TiO_2	MnO
Ⅷ	1	a	新沢千塚 126 号墳	碗	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	65.5	14.2	3.10	8.43	4.81	1.36	0.65		0.04
								66.5	14.0	3.37	6.80	7.31	1.36		0.09	0.028
		b		Ⅲ	○	○	Na_2O-CaO-SiO_2	69.8	18.1	0.60	5.92	0.48	1.96		0.07	0.373
	2		伝高屋築山古墳 (安閑天皇陵)	碗	○	-	-									
	3	a	大山古墳 (仁徳天皇陵)	碗	-	-	-									
		b		Ⅲ	-	-	-									

Fe_2O_3	CuO	ZnO	Rb_2O_3	SrO	ZrO_2	PbO	その他成分	出典	備考
1.975	0.209	0.0080	tr	0.0673	0.0199	0.326	CoO 0.056, NiO 0.009	金度潤ほか 2019	XRF, GL003
1.207	1.219	0.0117	0.0017	0.0506	0.0050	0.009		金度潤ほか 2019	XRF, GL021: 口縁 , 青色
1.205	1.160	0.0101	0.0020	0.0498	0.0042	0.007			XRF, GL023: 口縁 *, 青色
0.925	0.004	0.0074	0.0015	0.0474	0.0047	0.005			XRF, GL024: 胴 , 透明
0.885	0.008	0.0067	0.0018	0.0538	0.0038	tr			XRF, GL002: 胴 , 透明
0.48	<0.1						Cl 1.3, SO_3 0.31	金奎虎 2000	SEM/EDS, 淡い緑
0.70	1.4						Cl 1.2, SO_3 0.32		SEM/EDS, 青色の帯部分
1.0	<0.1						Cl 1.3, SO_3 0.31		SEM/EDS, 淡い緑 **
0.60	3.7					nd	Cl 1.2, SO_3 0.33	金奎虎 2000	SEM/EDS, 濃青
0.810	3.077	0.0137	0.0012	0.0367	0.0074	0.020	NiO 0.008, SnO_2 0.02	金度潤ほか 2019	XRF, GL015
0.780	0.035	0.0044	0.0009	0.0405	0.0021	tr		金度潤ほか 2019	XRF, GL005, 透明
0.91	<0.1					nd	Cl 1.4, SO_3 0.35	金奎虎 2000	SEM/EDS, 淡い緑 **
0.826	1.545	0.0110	0.0036	0.0267	0.0091	0.004		金度潤ほか 2019	XRF, GL022, 口縁部 ***
0.971	1.669	0.0081	0.0047	0.0297	0.0089	0.007			XRF, GL018
0.48	<0.1					nd	Cl 1.4, SO_3 0.40	金奎虎 2000	SEM/EDS, 無色 **
0.60	1.8					nd	Cl 1.5, SO_3 0.40		SEM/EDS, 青 **
0.767	1.784	0.0075	0.0042	0.0316	0.0096	tr		金度潤ほか 2019	XRF, GL006***
1.978	0.255	0.0164	tr	0.0489	0.0093	0.175	CoO 0.199,NiO 0.032		XRF, GL007***
1.856	0.256	0.0091	tr	0.0583	0.0110	0.470	CoO 0.067, NiO 0.011, SnO_2 0.02	金度潤ほか 2019	XRF, GL014
0.481	0.004	0.0028	0.0009	0.0517	0.0066	0.007	Y_2O_3 0.0007		XRF, GL013
0.875	1.660	0.0140	0.0038	0.0282	0.0098	0.007			XRF, GL017
1.533	0.241	0.0071	nd	0.0596	0.0111	0.386	CoO 0.072, NiO 0.013		XRF, GL008
1.237	0.004	0.0069	0.0026	0.0788	0.0066	0.005		金度潤ほか 2019	XRF, GL016: 側面 , 透明
1.222	0.895	0.0090	0.0020	0.0708	0.0060	0.007	Y_2O_3 0.0007		XRF, GL016: 口縁 , 緑
1.140	0.005	0.0047	0.0019	0.0775	0.0056	0.004	Y_2O_3 0.0008		XRF, GL001
1.113	0.011	0.0050	0.0020	0.0008	0.0058	0.004			XRF, GL010
1.056	tr	0.0035	0.0017	0.0007	0.0060	tr			XRF, GL011
1.083	tr	0.0035	0.0018	tr	0.0057	tr			XRF, GL012
									(新羅期資料か現在検討中)
								梅原 1931	
1.476	0.195	0.0089		0.0634	0.0105	0.279	CoO 0.054, NiO 0.005	金度潤ほか 2019	XRF, GL020
								国立金海博物館 2019:371	

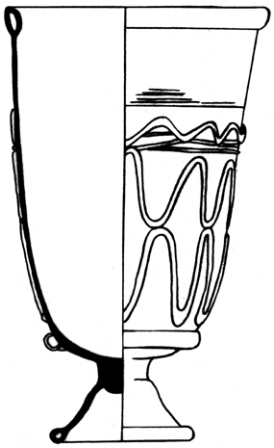
*GL021 は rim、GL023 は hoot base とあるが [金度潤ほか 2019]、共に口縁部と思われる。

** 金奎虎 [2000] はどの資料を測定したのか対照が難しい。1、2 点目測定資料は注口把手付瓶①と明記されているが、以下は次のように理解した。3 点目は「杯 (環状口縁)」なのでⅦ-3- ②、4 点目は「杯 (波状文)」なのでⅦ-3- ⑥、5 点目は碗なのでⅦ-3- ④、6 点目「杯片 (無色)」と 7 点目「杯片 (青色)」は該当資料不明。

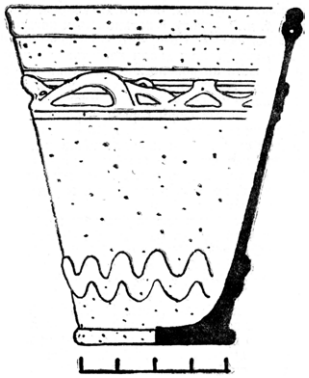
*** 図 6 Ⅶ-3- ⑤ (慶 3326) には透明な破片多数が写っている。金度潤ほか [2019] には試料写真が添付されており、GL022 は最も大きな口縁部破片であることがわかる。しかし「慶 3326」と同じ収蔵資料番号を持つものの、GL006 と GL007 は青色のガラス片で、どの器に該当する資料か不明である。

Fe_2O_3	CuO	PbO	その他成分	出典	備考
0.65				小田 [1977:86]	
0.516		nd		Abe *et al.*[2018]	XRF
1.29		nd			

ら、化粧品、葡萄酒、薔薇油であった可能性を指摘している[50]。現在のところ用途不明の鴨形器であるが、横置きする形で両方に開口部があるという点では、大秦鉄路湖東編組站 21 号墓の資料も形状も異なるが口とその反対側に穴があり、安定をとるためか口部側にボタン状の円形ガラスがついている。



1. カラ－アガチ
Kara-Agach



2. ジャル - アリク
Dzhal-Aryk

図 11　草原地帯より出土した波形ガラス紐装飾のある容器 (S=1/5)

■紐状装飾のある資料

ガラス紐で表面を装飾した紐状装飾は珍しい技法ではないが、東部ユーラシアの民族移動期の遺跡からその技法を用いた資料が出土している点に先行研究は着目している。梅原末治が金冠塚報告書で類例としてカザフスタン中部のカラ - アガチの古墳(クルガン)から出土した例を挙げ [梅原 1924:133, 図 49]、ヴェルナーも民族移動期を論じたその資料の中で、金冠塚とカラ - アガチ出土の紐状装飾のあるゴブレットを挙げている (図 11-1)[Werner1956: taf.68]。東部ユーラシアの民族移動期の遺跡でガラス容器が出土した古墳はもう 1 基あり、キルギスタンのジャル - アリク遺跡の古墳(クルガン)で出土した例も紐状装飾のあるタンブラー形の杯である (図 11-2)[Kozhomberdiev 1977]。民族移動期の遺跡で出土するこの時期に特徴的なガラス容器といえば青色斑点文で装飾された器もあるが、草原地帯西部では確認されるものの、現在のところ草原地帯東部では出土例がなく、新羅の金鈴塚と玉田 1 号墳で飛び地のように確認される状況がある。

(50 ①化粧品：クノッソス (Knossos) 出土品の中に残存した赤色粉末は赭石(しゃせき)、方解石、石英、スペイン出土品の中に残存した赤色粉末は赭石(しゃせき)、石膏か方解石、ロジン (松香) であった。②葡萄酒：ロカルノ (Locarno) 出土品の内壁を化学分析したところ、葡萄酒の残留物を検出。③薔薇油：イタリア・ロヴァセンダ (Rovasenda) 出土品による。

Ⅺ. おわりに

本稿では、およそ 3 世紀から 6 世紀初めのガラス容器出土例について集成した。同時代的に資料を通観できるものを目指したが、西域経由の輸入を考える上で重要な新疆以西の出土事例の集成は今後の課題である。成分分析が行われる事例も増えているが、測定した資料と測定値の対照が可能な形で報告され、当時の流通や地域的傾向など遺跡が形成された社会背景と共に考察できる材料となることを望んでいる。

謝辞：

本稿を作成するにあたり、岡村秀典先生 (京都大学人文科学研究所) には定県石函出土資料の写真を提供いただきました。また、下記の方々の協力を得ました。厚く感謝いたします。

東潮 (徳島大学名誉教授)、朱岩石 (中国社会科学院考古研究所)、向井佑介 (京都大学人文科学研究所) 葭森健介 (徳島大学名誉教授)

参考資料：

1)『洛陽伽藍記』巻 4 法雲寺：

而(しか)して河間王琛(ちん)最も豪首たり。……琛常に宗室に会すれば、諸宝器を陳(つら)ね、金瓶銀甕百余口、瓯(おうけい)槃盤盒(こ)是(し)れに称(かな)う。自余の酒器、水晶鉢、瑪瑙琉璃碗、赤玉巵数十枚有り。作工奇妙にして、中土には無き所、皆西域より来たれり。

2)『三国志』巻 30 魏書 30 烏丸鮮卑東夷伝 裴註所引『魏略』西戎伝：

大秦は金、銀、銅、鉄、鉛、錫、神亀、白馬、朱髦、駭鶏犀、瑇瑁、玄熊、赤螭、辟毒鼠、大貝、車渠、瑪瑙、南金、翠爵、羽翮、象牙、符采玉、明月珠、夜光珠、真白珠、虎珀、珊瑚、赤白黒緑黄青紺縹紅紫十種流離、璆琳、琅玕、水精、玫瑰、雄黄、雌黄、碧、五色玉、黄白黒緑紫紅絳紺金黄縹留黄十種氍毹、五色毼氈、五色九色首下毼氈、金縷繡、雑色綾、金塗布、緋持布、発陸布、緋持渠布、火浣布、阿羅得布、巴則布、度代布、温宿布、五色桃布、絳地金織帳、五色斗帳、一微木、二蘇合、狄提、迷迷、兜納、白附子、薫陸、鬱金、芸膠、薫草木十二種香多し。大秦道既に海より北して陸通じ、又海に循い而して南し、交趾七郡の外夷と比び、又水道有りて益州、永昌を通り、故に永昌は異物を出す。前世但水道有るを論じ、陸道有るを知らず、今其の略此の如く、其の民の人戸数備に詳らかにする能わざるなり。

3)『魏書』巻 102 列伝 90 西域　波斯国：

波斯国、都は宿利城、忸密の西に在り、古の條支国なり。代を去ること二万四千二百二十八里。城方十里、戸十余万、河其の城中を経て南流す。土地平正にして、金、銀、鍮石、珊瑚、琥珀、車渠、馬脳，多大真珠、頗梨、瑠璃、水精、瑟瑟、金剛、火斉、鑌鉄、銅、錫、朱砂、水銀、綾、錦、疊、氍、氍毹、毼氈、赤鬘皮、及び薫陸、鬱金、蘇合、青木等の香、胡椒、畢撥、石蜜、千年棗、香附子、訶梨勒、無食子、鹽緑、雌黄等の物を出す。

4)『芸文類聚』巻 73 雑記物類 盌：

晋潘尼の琉璃椀賦に曰く、

方貢の彼の珍を覧るに　諸国より献上された珍宝をみると

茲の椀の独奇なること瑋なり　この碗は特別に珍しい

流沙の絶険を済り　流沙で隔絶された地を渡り

葱嶺の峻危を越ゆ　葱嶺の峻険を越えてきた

其の由来や阻遠　そのやってきたところといえば遠く隔たっており

其の託する所や幽深　その碗に託されたところといえば幽玄で奥深い

重巒の億仞に據り　幾重にも連なった億仞の山々に立ち

洪渓の万尋を臨む　万尋の深さの渓谷に臨む

玉樹と瓊瑶に接し　玉樹と瓊瑶が交わり

沙棠と碧林に隣す　沙棠と碧林が隣り合う

閬風を瞻れば之れ崔嵬　崑崙山山頂の仙人が住むという閬風をみると荒々しく峻険な岩山で、

玄圃を顧れば之れ蕭参　崑崙山山頂の神仙が住む地にあるという奇岩や珍しい花の咲く玄圃の庭をかえりみると生い茂っている

光映るや日の曜　その光は太陽のように輝き

円の成るや月盈　その丸い形は満月のよう

纖瑕罔く麗　僅かな傷もなく麗しく

飛塵停まる靡し　浮遊する塵も付着しない

灼爍として旁燭　光り輝く様は灯火に均しく

表裏相形　(碗の) 表裏は同様に形が整っている

茲の椀を挙げて以て賓に酬むれば　この碗を掲げて賓客に返杯をすすめると

密坐之れ曲宴栄え　親密な座の宴は盛況で

流景烱晃以て内澈　その光景は明々と光輝き流れて行って (碗の内に) 透き通り

清醴瑶琰而して外に見ゆ　酒は美玉の色艶で外に透けて見える

5)『三国志』巻 53 呉書 8 張厳程闞薛伝　薛綜：

呂岱交州より召し出され、綜岱を継ぐ者が其の人にあらざるを懼れ、上疏して曰く「昔、帝舜南巡し、蒼梧に卒す。……日南郡の男女、倮体にして以て羞と為さず。此れに由りて之れを言えば、蟲豸と謂うべし。靦たるに面目有るのみ。然り而して土広く人衆く、阻険にして毒害あり、以て乱を為し易く、従治せしめ難し。県官羈縻し、令を示して威服し、田戸の租賦、裁に取りて供辦するも、遠きを致す珍しき名珠、香薬、象牙、犀角、瑇瑁、珊瑚、琉璃、鸚鵡、翡翠、孔雀、奇物を充備し、宝玩を貴べども、必しも仰ぎて其を賦入し、以て中国を益せざるなり。……」

6)『三国志』巻 47 呉書 呉主孫権伝 第 2 裴註所引『江表伝』

是の歳魏文帝遣使して雀頭香、大貝、明珠、象牙、犀角、瑇瑁、孔雀、翡翠、闘鴨、長鳴鶏を求む。群臣奏して曰く「荊、揚二州、貢常典有り。魏求むる所の珍玩之物、非礼なり。宜しく与うる勿れ」。権曰く「昔恵施、斉を尊び王たらしめ、客之を難しとして曰う「公の学、尊を去るに、今斉を王たらしむ、何ぞ其れ倒ならざるや？」と。恵子曰く「人此に有りて、其の愛子の頭を撃たんと欲す、而れど石以て之を代うるべし。子頭は重き所、而れど石は軽き所なれば、軽きを以て重きに代える、何為れぞ不可ならんや？」と。方西北に事有り、江表元元、主を恃み命となす、我が愛子に非ざるや？彼求むる所は我においては瓦石のみ，孤り何んぞ惜しむるや。彼は諒闇之中に在り、而れど此の若きを求むる所、寧んぞ与に礼を言うべけんや」。皆具に以て之を与う。

7)『南斉書』巻 58 列伝第 39 南夷 扶南国：

永明二年[484年]、闍耶跋摩（ジャヤヴァルマン）、天竺の道人釈那伽仙を遣り、上表し称扶南国王臣僑陳如闍耶跋摩（カウンディンヤ家のジャヤヴァルマン）叩頭して啓して曰く「天化撫育、……咸安泰を荷う（みな・にな）」と。又曰く、「……」と。又曰く、「臣に奴、名は鳩酬羅（クシューラ）有りて、臣を委て逸走し、別れて余處に在りて、兇逆を構結し、遂に林邑を破り、仍って自立し王たり。……今軽がるしく此に臣の丹誠を送らしむれど、表する所の陳啓、下情を尽くさず。謹んで那伽仙を附し并びに其の口を伴い具に啓

聞せん。伏して願う啓する所を愍まれんことを。并びに金鏤龍王坐像一躯、白檀像一躯、牙塔二躯、古貝二双、瑠璃蘇鉢二口、璹瑁檳榔枰一枚を献ず」と。

8)『魏書』巻 102 列伝 90 西域　大月氏国：

大月氏国、都は盧監氏城、弗敵沙の西に在り。代を去ること一万四千五百里。北は蠕蠕と接し、数ば侵さるる所と為り、遂に西に徙りて薄羅城を都とす。弗敵沙を去ること二千一百里。(後に) 其の王寄多羅、勇武にして、遂に師を興して大山を越え、南して北天竺を侵す。乾陁羅より以北の五国、尽く之に役属す。世祖の時、其の国の人京師に (到りて) 商販し、自ら石を鋳て五色瑠璃と為すこと能うと云い、是に於いて砿を山中に採り、京師に於いて之れを鋳る。既に成れば、光沢は乃ち西方より来たる者より美なり。乃ち詔して行殿を為り、百余人を容むれば、光色は映徹して、観者は之を見て驚駭せざる莫く、以て神明の作る所と為す。此れより中国、瑠璃遂に賤く、人復び之を珍とせず [51]。

参考文献：

＜日中朝韓＞ 出版年順・同一年は日本語五十音順

黒川真頼 1910「日本玻璃七宝説」『黒川真頼全集』3 (美術篇 , 工芸篇) 国書刊行会 :376-381.

朝鮮総督府 1924『慶州金冠塚と其遺宝』(古蹟調査特別報告第 3 冊).

梅原末治 1931『慶州金鈴塚飾履塚－大正 13 年度古蹟調査報告－』朝鮮総督府 .

石田茂作 1950「西琳寺白瑠璃埦」『考古学雑誌』36-4, 日本考古学会 : 52-57.

張季 1957「河北景県封氏墓群調査記」『考古通訊』1957-3: 28-37.

李鑑昭・屠思華 1958「南京石門坎郷六朝墓清理記」『考古通訊』1958-9: 66-69.

南京市文物保管委員会 1965「南京象山東晋王丹虎和二、四号墓発掘簡報」『文物』1965-10:29-45.

北京市文物工作隊 1965「北京西郊西晋墓王浚妻華芳墓清理報告」『文物』1965-12: 41-44,59.

深井晋司 1965「ハッサニ・マハレ遺跡出土の突起装飾瑠璃碗に關する一考察」『東洋文化研究所紀要』36, 東京大学東洋文化研究所 :1-22.

河北省文化局文物工作隊 1966「河北定県出土北魏石函」『考古』1966-5: 252-259.

湖北省博物館 1966「湖北漢陽蔡甸一号墓清理」『考古』1966-4: 193-196.

斎藤忠 1971『日本古代遺跡の研究』文献編 下 , 吉川弘文館 .

内田吟風 1972「魏書西域伝原文考釈 (下)」『東洋史研究』31-3 東洋史研究会 :58-72.

南京市博物館 1972「南京象山五号、六号、七号墓清理簡報」『文物』1972-11: 23-36.

由水常雄 1972『ガラスの道』徳間書店 .

金日成総合大学考古学・民族学講座：김일성종합대학 고고학및민속학강좌 1973『대성산의 고구려 유적』김일성종합대학 출판사 . [『大城山の高句麗遺跡』金日成総合大学出版社 .]

黎瑶渤 1973「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」『文物』1973-3: 2-19.

南京大学歴史系考古組 1973「南京大学北園東晋墓」『文物』1973-4: 36-46.

深井晋司 1973『ペルシアのガラス』淡交社 .

大韓民国文化広報部文化財管理局編 1975『天馬塚発掘調査報告書』学生社 [日本語版]

由水常雄 1976a「古新羅古墳出土のローマン・グラスについて」『朝鮮学報』80, 朝鮮学会 : 37-71.

由水常雄 1976b「新羅九八号南墳出土のガラス」『GLASS: ガラス工芸研究会誌』2 ガラス工芸研究会 :26.

小田幸子 1977「新沢千塚 126 号墳出土のガラス器とガラス玉」『新沢千塚 126 号墳』奈良県教育委員会 :84-90.

橿原考古学研究所編 1977『新沢千塚 126 号墳』奈良県教育委員会 .

鄂城県博物館 1978「鄂城東呉孫将軍墓」『考古』1978-3:163,164-167.

池健吉・趙田典 1981『安溪里古墳群発掘調査報告書』韓国文化財管理局 .

范世民・周宝中 1982「網文玻璃杯考略」『文物』1982-8:67-69.

韓炳三編著 1983『国宝 : 7000 年의 韓國文化遺産』1. 古墳金属 , 藝耕産業社 .

湖北省博物館保管部歴史文物庫 1983「漢陽蔡甸一号墓出土古玻璃試析」『江漢考古』1983-3:97-99.

南京市博物館 1983「南京北郊東晋墓発掘簡報」『考古』1983-4: 315-322.

范世民・周宝中 1983「館蔵部分玻璃制品的研究－兼談玻璃史的若干問題」『中国歴史博物館館刊』5: 97-104.

(51 カッコ文字は内田吟風 [1972:62] に基づき補った。

安家瑶 1984「中国的早期玻璃器皿」『考古学報』1984-4:413-448.

建築材料研究院・清華大学・中国社会科学院考古研究所 1984「中国早期玻璃器検験報告」『考古学報』1984-4: 449-457.

谷一尚 1985「切子ガラス括碗(くびれ)の系統と伝播」『オリエント』28-1: 116-130.

文化財管理局編 1985『皇南大塚Ⅰ北墳発掘調査報告書』韓国文化財管理局 .

安家瑶 1986a「北周李賢墓出土的玻璃碗－薩珊玻璃器的発現與研究」『考古』1986-2: 173-181.

安家瑶 1986b「中国的早期 (西漢－北宋) 玻璃器皿」『中国古玻璃研究』(1984 年北京国際玻璃学術討論会論文集) 中国建築工業出版社 :86-104.

干福熹・黄振発 1986「中国古玻璃化学組成的演変 (編後)」『中国古玻璃研究』(1984 年北京国際玻璃学術討論会論文集) 中国建築工業出版社 :138-143.

東潮・田中俊明 [編著]1988『韓国の古代遺跡』1 新羅 中央公論社 .

国立慶州博物館 1990『慶州市月城路古墳群』国立慶州博物館・慶州市 .

周錚 1991「封魔奴墓誌考釈」『北朝研究』1991-1:86-93.

NHK 大阪放送局 1992『正倉院の故郷－中国の金・銀・ガラス－展』.

慶尚大学校博物館編 1992『陜川玉田古墳群Ⅲ』(慶尚大学校博物館調査報告 7).

蒋贊初 1992「南京東晋帝陵考」『東南文化』1992-3・4:98-106.

由水常雄編 1992『世界ガラス美術全集』第 4 巻 中国・朝鮮 求龍堂 .

文化財管理局編 1994『皇南大塚Ⅱ南墳発掘調査報告書』韓国文化財管理局 .

東潮・田中俊明 [編著]1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社 .

広州市文物管理委員会 1996「広州市下塘獅帯崗晋墓発掘簡報」『考古』1996-1:36-45.

羅宗真 1996『六朝考古』南京大学出版社 .

艾倫 約翰斯頓 莱贏 (Ellen Johnston Laing) (楊瑾訳)1998「遠東地区発現的西亜玻璃総述」『陜西歴史博物館館刊』5, 西北大学出版社 : 304-317. [Johnston Laing Ellen, 1991, A report on Western Asian glassware in the Far East, *Bulletin of the Asia Institute, vol.5*: 109-121.]

鄂州博物館・湖北省文物考古研究所 1998「湖北鄂州鄂鋼飲料廠一号墓発掘報告」『考古学報』1998-1:103-131.

南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998「江蘇南京市富貴山六朝墓発掘簡報」『考古』1998-8: 35-47.

小野田伸 1999「古代ガラスを意味する「琉璃」と「瑠璃」について」『GLASS』日本ガラス工芸学会 : 27-30.

曾布川寛・岡田健責任編集 2000『世界美術大全集』東洋編第 3 巻 三国・南北朝 小学館 .

金奎虎(キム キュホ) 김규호 2000「慶州皇南大塚南墳出土琉璃의 科学的研究」『皇南大塚의 諸昭明』(第 1 回国立慶州文化財研究所国際学術大会) 国立慶州文化財研究所 :129-151. [「慶州皇南大塚南墳出土ガラスの科学的研究」『皇南大塚の諸昭明』]

熊寿昌 2000「論鄂城東呉孫将軍墓與鄂鋼飲料廠一号墓之墓主人身份及其相互関係」『東南文化』2000-9:34-40.

安家瑶 2001「玻璃考古三則」『文物』2001-1: 89-96.

関善明 2001『中国古代玻璃』香港中文大学文物館 .

南京市博物館 2001「江蘇南京仙鶴観東晋墓」『文物』2001-3: 4-40,91.

南京市博物館 2002「南京北郊東晋温嶠墓」『文物』2002-7:19-33.

王志高 2003「南京大学北園東晋大墓的時代及墓主身份的討論－兼論東晋時期的合葬墓」『東南文化』2003-9:43-52.

呉桂兵 2003「南京大学北園東晋大墓的形制、墓主及其他－両晋偏室墓研究之一」『東南文化』2003-9:35-42.

広東省文物考古研究所等 2004「広東肇慶市坪崗東晋墓」『華南考古』1 文物出版社 : 248-264.

山西省大同市考古研究所 2004「大同湖東北魏一号墓」『文物』2004-12：26-34.

王銀田 2005「薩珊波斯與北魏平城」『敦煌研究』2005-2: 52-57.

安家瑶・劉俊喜 2006a「北魏玻璃」『漢代考古與漢文化国際学術研討論会論文集』斉魯書社 :550-557.

安家瑶・劉俊喜 2006b「大同地区的北魏玻璃器」『4～6 世紀的北中国與欧亜大陸』科学出版社 :37-46.

干福熹 2006「古代絲綢之路和中国古代玻璃」『自然雑誌』28-5: 253-260.

広西壮族自治区文物工作隊・合浦県博物館 2006『合浦風門嶺漢墓―2003~2005 年発掘報告』科学出版社 .

山西大学歴史文化学院・山西省考古研究所・大同市博物館 2006『大同南郊北魏墓群』科学出版社 .

李軍・羅海明 2006「安徽当塗来隴東晋墓発掘簡報－兼論出土玻璃碗残片的類別和来源」『東南文物』2006-2: 33-39.(王俊主編 2008『馬鞍山六朝墓葬発掘與研究』科学出版社再収)

大同市考古研究所 2006a「山西大同七里村北魏墓群発掘簡報」『文物』2006-10: 25-49.

大同市考古研究所 2006b「山西大同迎賓大道北魏墓群」『文物』2006-10: 50-71.

安徽省文物考古研究所・馬鞍山市文物管理所 2007「安徽馬鞍山宋山東呉墓発掘簡報」『江漢考古』2007-4.

王義康 2007「正倉院蔵西方風格玻璃器研究」『中国歴史文物』2007-6:13-26.

南京大学歴史系考古専業・湖北省文物考古研究所・鄂城市博物館編著 2007『鄂城六朝墓』科学出版社 .

南京市博物館 2008「南京市郭家山東晋温氏家族墓」『考古』2008-6:3-25.

毛遠明 [校注]2008『漢魏六朝碑刻校注』2 線装書局 .

鎮江博物館・句容市博物館 2010「江蘇句容春城南朝宋元嘉十六年墓」『東南文化』2010-3: 37-43.

国立中央博物館 : 국립중앙박물관 2010『황금의 나라 : 신라의 왕릉 황남대총』[『黄金の国：新羅の王陵 皇南大塚』]

咸舜燮(ハム スンソプ)함순섭 2010「皇南大塚을 둘러싼 論争 , 또 하나의 可能性」『황금의 나라 : 신라의 왕릉 황남대총』:225-244.[「皇南大塚をめぐる論争 , また一つの可能性」『黄金の国:新羅の王陵 皇南大塚』]

斉東方主編 2010『中国美術全集』金銀玻璃器 , 黄山書社 .

王志高 2011「六朝墓葬出土玻璃容器漫談－試析朝鮮半島三国時代玻璃容器的来源」『南京博物院集刊』12 文物出版社 :55-63.

熊昭明・李青会 2011『広西出土漢代玻璃器的考古学與科技研究』文物出版社 .

白神典之 2011「明治壬申仁徳御陵前方部石槨発見顚末記」『堺市博物館報』31 堺市博物館 :13-29.

岡村秀典・廣川守・向井佑介・韓立森・朱岩石 2012「河北定州北魏石函出土文物の研究」『中国の初期仏教寺院とその源流にかんする考古学的研究』(平成 20 年度～平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究 B 研究成果報告書) 京都大学人文科学研究所 :41-64.

加藤俊吾 2013「「古川躬行『壬申十月 大山陵より顕れし石棺の考へ同図添』」(写本) について」『大阪歴史博物館研究紀要』11 大阪市文化財協会 :73-81.

韓国考古学会編 (武末純一監訳、庄田慎矢・山本孝文訳)2013『概説 韓国考古学』同成社 .

韓立森・朱岩石・胡春華・岡村秀典・廣川守・向井佑介 2013「河北省定州北魏石函出土遺物再研究」『考古学集刊』11 科学出版社 : 277-299.

国立慶州博物館 2014『天馬、다시 날다』(新羅陵墓特別展 3 天馬塚)[『天馬、再び飛ぶ』]

山西省考古研究所・大同市考古研究所 2014「山西大同県湖東北魏墓 (M11) 発掘簡報」『文物』2014-1:28-36.

趙永 2014「新疆且末扎滚魯克 49 号墓出土玻璃杯的年代問題」『考古與文物』2014-4:77-80.

朴辰一(パク シンイル)・沈秀娟(シム スヨン)編 2014『慶州瑞鳳塚Ⅰ (遺物篇)』(日帝強占期資料調査報告 13) 国立中央博物館 .

馬艶 2014「大同出土北魏磨花玻璃碗源流」『中原文物』2014-1: 96-100.

安家瑶 2015「馮素弗墓出土的玻璃器」『北燕馮素弗墓』文物出版社 :224-237.

蘇会和・高薇・劉寧 2015「馮素弗墓出土玻璃器物成分的電子顕微鏡検測報告」『北燕馮素弗墓』文物出版社 :246-263.

大成洞古墳博物館 2015『金海大成洞古墳群－ 85 호분～ 91 호분－』(博物館学術叢書 15). [『金海大成洞古墳群－ 85 号墳～ 91 号墳－』]

遼寧省博物館 2015『北燕馮素弗墓』文物出版社 .

劉寧 2015「「北燕、柔然與草原絲綢之路－従馮素弗墓出土的玻璃器談起」『北燕馮素弗墓』文物出版社 :238-245.

国立慶州博物館 2016『慶州金冠塚 (遺物篇)』(日帝強占期資料調査報告 23).

大同市博物館 2016『平城文物精粋：大同市博物館館蔵精品録』江蘇鳳凰美術出版社 .

馬啓亮 2016「嶺南六朝墓葬的区域研究」『東南文化』2016-2: 79-90.

大谷育恵 2017「モンゴルならびに中国の遺跡で出土した漢代並行期のガラス容器 (資料集成)」『金大考古』76 金沢大学人文学類考古学研究室 :65-

73.
朱瑛培・温睿 2017「試論魏晋南北朝玻璃器皿的社会功能」『洛陽考古』2017-3:42-46.
中国国家博物館編 2017『中国国家博物館館蔵文物研究叢書』墓誌巻 , 上海古籍出版社 .
中国人民大学歴史学院考古文博系・錫林郭勒盟文物保護管理站・正鑲白旗文物管理所 2017「内蒙古正鑲白旗伊和淖爾 M1 発掘簡報」『文物』2017-1: 15-34.
馬永強 2017「江蘇邳州煎薬廟西晋墓地」『2016 中国重要考古発現』文物出版社 .
馬麗亜 艾海提・金誠実・静永傑 2017「内蒙古北魏墓出土薩珊玻璃器及其相関問題」『文博』2017-4:53-59.
林梅村 2017「南京象山 7 号墓出土西方舶来品考－兼論公元 5 世紀中国與東羅馬帝国之間絲綢之路」『絲路文明』2, 上海古籍出版社 :75-89.
山西省考古研究所・山西省大同市考古研究所 2018「山西大同湖東北魏墓群発掘簡報」『中国国家博物館館刊』2018-1:47-79.
高久健二 2018「新羅積石木槨墓の埋葬プロセス：皇南大塚を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』211 国立歴史民俗博物館 :167-209.
程雅娟 2018「敦煌壁画絵小型玻璃器研究：絲綢之路上玻璃東伝過程中的仏教化演変」『美術與設計』2018-5:84-93.
南京博物院・徐州博物館・邳州市博物館 2018「江蘇邳州煎薬廟西晋墓地 M1 発掘簡報」『東南文化』2018-2:20-32.
金度潤 김도윤・李承恩 이승은・阿部善也・四角隆二・村串まどか・東容子 2019「国立慶州博物館所蔵琉璃調査」『新羅文化研究』12 国立慶州博物館 :19-39.
金鍾佑 김종우 2019「경주황남대총 남분 출토 신라 앵무배」『박물관보존과학』제 22 집 국립중앙박물관 . [「慶州皇南大塚南墳出土新羅鸚鵡杯」『博物館保存科学』22, 国立中央博物館 .](邦訳版:『金大考古』81: 59-69)
国立金海博物館 : 국립김해박물관 2019『국립김해박물관』. [『国立金海博物館』]
東京国立博物館 2019『御即位記念特別展 正倉院の世界：皇室がまもり伝えた美 (御即位記念特別展)』.
員雅麗・馮鋼 2020「北斉韓祖念墓出土玻璃杯考－兼論魏晋南北朝時期波斯玻璃器之東伝」『華夏考古』2020-2:98-108.
徳田誠志 2020「「伝安閑天皇陵出土ガラス碗」再発見の経緯と東京国立博物館への収蔵について：加藤三之雄教授 (第二代社会学部長) の関与」『関西大学博物館紀要』26, 関西大学博物館 :1-15.
付龍騰 2020「三国西晋陵寝制度新論」『中原文物』2020-2:67-78.
国立慶州博物館 : 국립경주박물관 2021『오색영롱 한국고대유리와 신라』[『五色玲瓏：韓国古代ガラスと新羅』]
小寺智津子 2023『ガラスの来た道：古代ユーラシアをつなぐ輝き』(歴史文化ライブラリー 563) 吉川弘文館 .

＜欧文＞

Abe Yoshinari, Shikaku Ryuji, Yamamoto Masakazu, Yagi Naoto, Nakai Izumi, 2018, Ancient glassware travelled the Silk Road: Nondestructive X-ray fluorescence analysis of the fragment of a facet-cut glass vessel collected at Kamigamo Shrine in Kyoto, Japan, *Journal of archaeological science, vol.20*, Elsevier Ltd: 362-368.
An Jia-yao, 2009, Glasses of the Northern Wei dynasty found at Datong, *Ancient Glass research along the Silk Road*, World Scientific: 379-386.
Haberey Waldemar, 1966, Zur Herstellung der römischen wabenbecher, *Bonner jahrbücher, 166*: 208-212.
Kozhomberdiev I.: Кожомбердиев И., 1977, Основные этапы истории культуры Кетмень-Тюбе, *Кетмень-Тюбе : археология и история*, Фрунзе: Илим: 9-24. [「ケトメニ - テュベの基本的な歴史文化段階」『『ケトメニ - テュベ：考古学と歴史』]
Kozyrev A. F.: Козырев А. А., 1905, Раскопка кургана в урочище Кара-Кгач, *Известия императорской археологической комиссии, вып.16*, СПб: 27-36. [「カラ - アガチのクルガンの発掘」『帝国考古学委員会報』16]
Ploskikh V. M., Vinnika D. F.[eds.]: Плоских В. М., Винника Д. Ф.[ред], 1977, *Кетмень-Тюбе : археология и история*, Фрунзе: Илим. [『ケトメニ - テュベ：考古学と歴史』]
Werner Joachim, 1956, *Beiträge zur Archäologie des Attila-Reiches*, Bayerische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse.

図版出典：

図 1　地図は著者作成。Ⅱ -1. 由水常雄編 1992, 図 32　Ⅱ -2a. 南京大学歴史系考古専業ほか 2007, 彩版 15-14　Ⅱ -3. 馬永強 2017, p.108 上中　Ⅲ -2. 王俊主編 2008, 彩版 3-3　Ⅲ -3. 南京大学歴史系考古組 1973, p.47, 図 3　Ⅲ -4. 広東省文物考古研究所等 2004, 彩版 16-3　Ⅲ -5-7. 著者撮影　Ⅲ -10a. NHK 大阪放送局 1992, 図 68　Ⅳ -a. 遼寧省博物館 2015, 彩版 29-2　b. 同 , 彩版 31-1　c. 同 , 彩版 30-1　d. 同 , 彩版 32-1　Ⅴ . 鎮江博物館・句容市博物館 2010, 彩挿 2-5　Ⅵ -1. 大同市博物館 2016, p.58 上　Ⅷ -1a. 橿原考古学研究所編 1977, 図版 29 上　b. 同 , 図版 29 下　Ⅷ -2. 東京国立博物館 2019, 図 94

図 2　Ⅵ -2. 中国人民大学歴史学院考古文博系ほか 2017, 表紙　Ⅵ -3. 大同市博物館 2016, p.60 下　Ⅵ -4. 著者撮影　Ⅵ -5,6. An Jia-yao, 2009, p.382, Pl.19.3　Ⅵ -7. 岡村秀典氏撮影・提供　Ⅵ -8. 由水常雄編 1992, 図 37　Ⅵ -9. 斉東方主編 2010, 図 408 下　参考 . 大同市考古研究所 2006b, p.68 図 54

図 3　Ⅱ -1. 安家瑶 1986a, p.173 図 2　Ⅱ -2a. 南京大学歴史系考古専業ほか 2007, p.304 図 219-3　Ⅱ -3. 南京博物院ほか 2018, p.30 図 17-11　Ⅱ -4. 鎮江博物館・句容市博物館 2010, p.259 図 13-4　Ⅱ -6. 南京市博物館 2001, p.21 図 69 底　Ⅲ -7. 南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998, p.42 図 11-5　Ⅲ -7 参考 . 同 , p.42 図 11-2　Ⅳ -a. 遼寧省博物館 2015, p.35 図 23-1　b. 同 , p.35 図 23-1　d. p.35 図 23-3　e.p.35 図 23-4　Ⅴ . 鎮江博物館・句容市博物館 2010, p.41 図 7-5　Ⅵ -1. 山西大学歴史文化学院ほか 2006, p231 図 105

図 4　Ⅳ -c. 遼寧省博物館 2015, p.36 図 24　Ⅵ -2. 中国人民大学歴史学院考古文博系ほか 2017, p.32 図 54-2　Ⅵ -4. 大同市考古研究所 2006b, p.64 図 38-1　Ⅵ -5. 大同市考古研究所 2006a, p.36 図 26-4　Ⅵ -6. 大同市考古研究所 2006b,p.36 図 26-3　Ⅵ -7a. 河北省文化局文物工作隊 1966, p.257 図 13-2　b. 同 , p.257 図 10-13　c. 同 , p.257 図 12-1　d. 韓立森ほか 2013, p.292 図 2-3 上　e,f. 同 , p.292 図 2-3　g. 同 , p.292 図 2-4

図 5. 金日成総合大学考古学・民族学講座 1973, 巻頭

図 6　地図は著者作成。Ⅶ -1. 由水常雄編 1992, 図 230　Ⅶ -2a. 国立慶州博物館 2021, p.204　Ⅶ -3- ① . 国立中央博物館 2010, 図 106　Ⅶ -3- ② , ③ . 韓炳三編著 1983, 図 30　Ⅶ -3- ④ . 同 , 図 31　Ⅶ -3- ⑤ . 国立中央博物館 2010, 図 101　Ⅶ -3- ⑥ . 韓炳三編著 1983, 図 32　Ⅶ -3- ⑦ . 国立中央博物館 2010, 図 94(中 , 右)　Ⅶ -4a. 韓炳三編著 1983, 図 18　Ⅶ -4b. 文化財管理局編 1985 図版 13-1　Ⅶ -4c. 著者撮影　Ⅶ -4d. 右 : 文化財管理局編 1985 図版 134-3　左 : 国立中央博物館 2010, 図 94(左)　Ⅶ -4e. 文化財管理局編 1985 図版 134-1　Ⅶ -5. 著者撮影　Ⅶ -6a. 国立慶州博物館 2016, p.339 図版 9-69 上　Ⅶ -6b. 右 : 同 , p.339 図版 9-70~73　左 : 朝鮮総督府 1924 図版 31-2　Ⅶ -6c. 国立慶州博物館 2016, p.339 図版 9-74　Ⅶ -6d. 同 , p.339 図版 9-75　Ⅶ -7a,b. 国立中央博物館 2010, 図 42　Ⅶ -8a. 国立慶州博物館 2014, 図 95　Ⅶ -8b. 上 : 同 , 図 96　下 : 大韓民国文化広報部文化財管理局編 1975, p.154 挿図 137　Ⅶ -9. 由水常雄編 1992, 図 232　Ⅶ -10a. 国立金海博物館 2019, 図 371　Ⅶ -10b. 国立慶州博物館 2021, p.227 図 210　Ⅶ -11. 同 ,p.227 図 211

図 7　Ⅶ -1. 池健吉・趙田典 1981, p.60 図面 11-5　Ⅶ -2a. 国立慶州博物館 1990, p.169 図面 83-7 左　Ⅶ -3- ① ~ ⑦ . 文化財管理局編 1994, 図面 72-1~7　Ⅶ -4a. 文化財管理局編 1985, p.125 図 16　Ⅶ -4b. 同 , p.126 図 17　Ⅶ -4c. 同 , p.126 図 18　Ⅶ -4d. 同 , p.126 図 19　Ⅶ -5. 梅原末治 1931, p.132　Ⅶ -6b. 国立慶州博物館 2016, p.23 図面 9-69　Ⅶ -6b. 上 : 朝鮮総督府 1924, 図版 32-3　下：国立慶州博物館 2016, p.23 図面 9-70　Ⅶ -6c,d. 同 , p.23 図面 9-74,75　Ⅶ -7a,b. 朴辰一・沈秀娟編 2014,p97 図 43-282,283　Ⅶ -8a. 大韓民国文化広報部文化財管理局編 1975, p.154 挿図 136　Ⅶ -8b. 同 , p.154 挿図 138　Ⅶ -9. 慶尚大学校博物館編 1992, p.109 図 60-18 下　Ⅶ -10a. 大成洞古墳博物館 2015, p.190 図面 86

図 8　1. 橿原考古学研究所編 1977, p.46 図 27　2. 上：p.50 図 30　下：同 , p49 図 29

図 9　Ⅳ -5. 南京市博物館 1972, p.29 図 8　Ⅳ -6. 南京市博物館 2001, p.5 図 3 一部、同 p.8 図 9　Ⅳ -7. 南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998, p.39 図 8　Ⅵ -1. 山西大学歴史文化学院ほか 2006, p.225 図 105A、同 p.229 図 105B、同 p.232 図 105F　Ⅶ -8. 韓国考古学会編 2013, p.337 図 241 上、大韓民国文化広報部文化財管理局編 1975, 図面 11

図 10　著者作成

図 11　1. Werner J. 1956, taf.68-1　2.　上：Ploskikh & Vinnika 1977,c.20,рис.6　下：著者撮影